

文部科学省委託
令和6年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進

「重度医療的ケア者対象の
訪問型生涯学習支援」に関する実践研究
報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

目次

項目	頁
はじめに	1
I 研究計画	2
1. 目的	2
2. 方法	2
3. 研究の全体像	3
II 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム	4
1. 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」のプログラム開発	4
2. 研究方法	4
3. 結果	4
4. 考察～学びの履歴書をつくるために～	12
III 運営・地域連携	13
1. 研究テーマ	13
2. 研究方法	13
3. 記録	15
4. 考察	19
IV 人材育成	21
1. これまでの研究の到達点と課題	21
2. 方法	21
3. 結果	21
(1) 各団体の今年度の取り組みの経過とまとめ	21
(2) 学生ボランティアの派遣に関するアンケート調査報告	36
V 理解啓発	42
1. これまでの研究の到達点と課題	42
2. 実施内容	42
3. 実施記録	43
4. 考察	65
VI 研究のまとめと提言(案)	67
おわりに	69

はじめに

「学生が紡ぎだすその一音一音から生命があふれる。『ぼく、私はここにいるよ』と、その息づかいが空気の中に音の中に流れ、伝わってくる」とは、音楽療法の先生の言葉です。訪問カレッジ生全員が、このように、精一杯生命をかけて学んでいます。このような学ぶ姿の尊さに背中を押されて、多くの方が支援しています。

重度障害者・生涯学習ネットワークは、平成29年(2017年)に創設、8年目です。現在18団体が加入、学生数約190名、学習支援員(概ね元教員)約160名です。各団体は、それぞれ特色のある活動をしています。そして、それぞれ独自に活動していますが、ネットワーク化によって、重度障害者の生涯学習を目的とする「チーム」となっています。そして、次の「5つのC」を理念としてチーム力を高め、結束力を強めています。「5つのC」とは、①コモン・パーパス(Common Purpose) ②コネクション(connection) ③コミュニケーション(Communication) ④コラボレーション(Collaboration) ⑤セレブレーション(Celebration)です。更に、この「5つのC」を連動させて充実を図りたいと考えています。(※アメリカのギャラップ社の調査から)

ここに令和6年度の取り組みをまとめましたので、ご報告いたします。

訪問型学習支援事業(訪問カレッジ)は、まだまだ知られていない状況です。今後は、周知の機会や場を設けて、より多くの方の理解を推進し、参加していただけるように致します。

重度障害者・生涯学習ネットワーク

代表 飯野 順子

I 研究計画

1. 目的

近年、医療技術の進歩を背景に、たんの吸引や経管栄養等の医療的ケアが日常的に必要な「医療的ケア児」が増加し、令和3年9月に「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」（通称、医療的ケア児支援法）が施行され、学校において保護者の付添いがなくても適切な医療的ケア等の支援を受けられるようになってきた。

しかし、学校教育において、自宅に教師を派遣する訪問教育を受けていた生徒の場合、学校卒業後は生活介護事業所等に通えないために在宅生活を余儀なくされている。また、病気の進行にともない人工呼吸器等が必要になるなどして通所施設等に通えなくなると、通所施設を退所せざるをえない。

このような重度医療的ケア者の学校卒業後の学びや、社会とのつながりを継続する方法として始めたのが「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」（以下、訪問カレッジ）である。訪問カレッジで学ぶ学生の多くは、人工呼吸器等など濃厚な医療を必要としている重度肢体不自由者または重症心身障害者であることから、ここでは「重度医療的ケア者」と呼ぶ。

神奈川県で開催した令和4年度の連携協議会では、東京都日野市の「日野市障害者訪問学級」、東京都新宿区の生涯学習への参加に移動支援の活用した事例の紹介を元に検討した。日野市は社会教育としての位置づけであり、新宿区は自宅での学びに障害福祉の移動支援を活用する方法であった。

令和5年度本事業の成果は次の2点である。

①連携協議会の成果

「研究課題②運営・地域連携」は、本事業の事務局である「NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」が、神奈川県の助言と協力を受けながら進め、令和6年度からは「ボランティア活動推進基金による神奈川県との協働事業」として活動を始める予定である。

②障害福祉計画への反映

国が策定した障害者基本計画（第5次計画 令和5年度～令和9年度）では、

障害者が生涯にわたり教育やスポーツ、文化などの様々な機会に親しむことができるよう、訪問支援を含む多様な学習活動を行う学びの場やその機会を提供・充実する。（p54）

と記載されたことも、本事業の成果と考える。

本年度も重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」を持続可能な制度にすることを目的に、「①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム、②運営・地域連携、③人材育成、④理解啓発」の4つの項目で実践研究を行った。

2. 方法

(1) 事業内容

1) 訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」の運営及びネットワークの間の交流

2) 研究活動(本事業)

①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体の実践を元にした研究

②運営・地域連携

「訪問カレッジ」を持続可能な制度にするための制度モデルの研究

③人材育成

「訪問カレッジ」の学習支援員やボランティアの育成の研究

④理解啓発

学会等で「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する理解啓発

3) 「第3回 学びの実り文化祭」(共生社会コンファレンス)の開催(本事業)

午前 ①学生参加の音楽発表 ②プロの演奏家による演奏の鑑賞

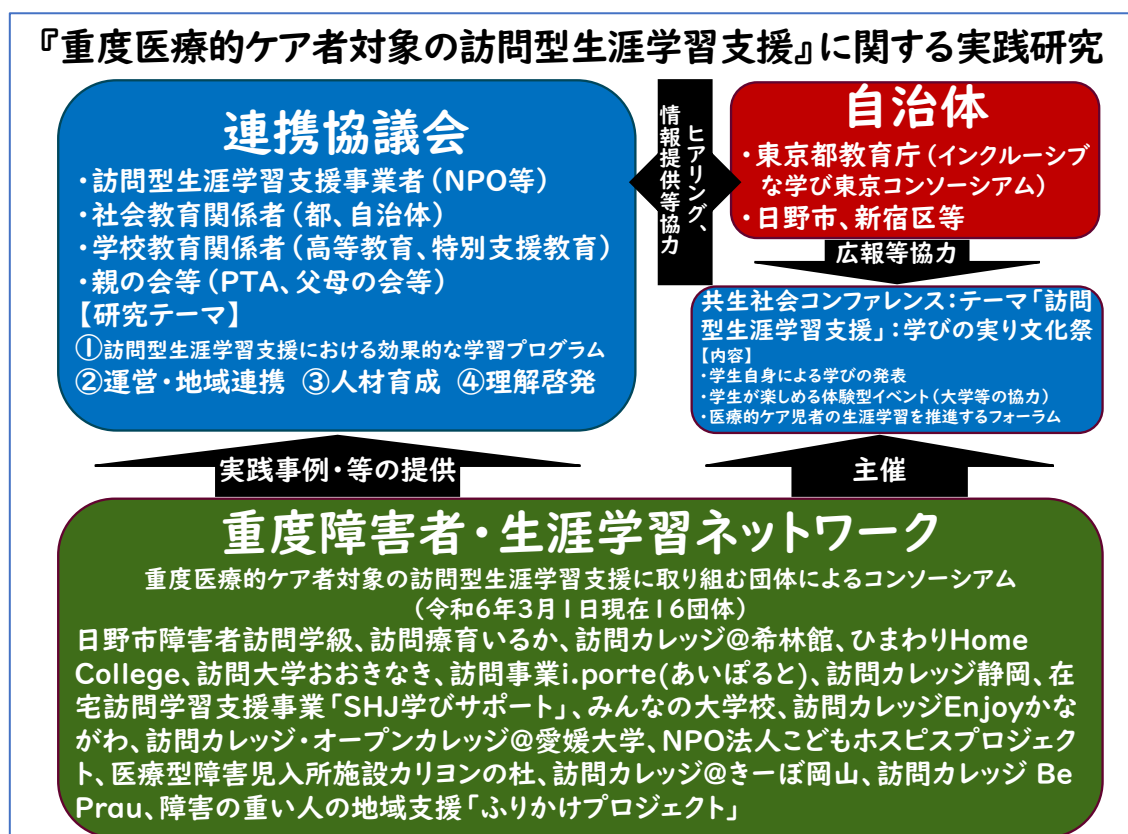
午後 第5回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム

(2) 事業実施体制・連絡先

1) 重度障害者・生涯学習ネットワーク:訪問型生涯学習支援に取り組む16団体(大学、NPO、一般社団法人等)で組織。

2) 連携協議会:都内教育関係(都教育委員会、基礎自治体、高等教育、特別支援学校)、親の会、ボランティア団体、重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体等

3. 研究の全体像



Ⅱ 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

1. 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」のプログラム開発

これまでの本研究によって、「①五感を活用した取り組みとそのための教材の工夫。②入力スイッチの工夫による絵画、音楽、創作など表現豊かな活動。さらに、個人の作品を発表する機会を設けることで、自己肯定感を高めていた。③外出が困難ではあるが、校外学習の機会を設けたり、オンラインの活用による模擬体験を行ったりしている。④学びの履歴の在り方研究し、評価による意欲の向上を図る。⑤集合型の学びや可能な行事を組み立てる。」などが行われていることを明らかにした。

以上を踏まえて、訪問カレッジの実践内容を類型化し、学びの蓄積を「見える化」する。

2. 研究方法

(1) 重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体（以下、ネット会員）は訪問カレッジの活動として次の作業を行った。

①年間計画をたてて、個人用のシラバスとし、年間の終わりに評価をする。できるだけ、書面による評価とし。学びの履歴書とする。さらに、本人やご家族の励みとする。

②一人一人に応じた類型化に基づく学習プログラム立てて、個に応じた教材や補助具を作成する。

(2) 実践の集約と分析

①全ネット会員（16 団体）を通じて、授業記録等の実践を収集、分析して、学生の学びのニーズに関する個性に応じた効果的な学習プログラムについて研究する。

②学習支援者や講師等を確保し、学習に取り組めるようにする。ボランティアも組織する。

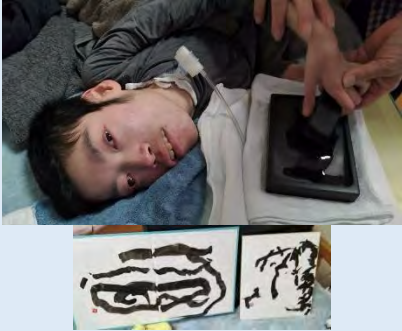
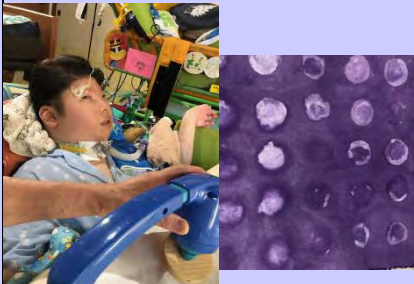
3. 結果

(1) 訪問型生涯学習の類型について

【自然科学分野】（⇒理科の授業） 物理・化学 生活に身近な実験 科学 動物（好きな動物・恐竜等の古代の動物） 生物 植物 栽培活動（野菜・草花・樹木） 宇宙や星空の学習
【社会科学分野】歴史（古代の歴史・時代の変遷 絵本による日本の歴史） 地理（世界～世界遺産） 新聞等による社会的知識（社会 経済 住んでいる地域研究）
【人文科学分野】（⇒国語・数学・美術・音楽の授業） 文学 読書活動（絵本の読み聞かせ） 創作活動（俳句・短歌・詩・絵本・小説） 外国語（英語）
【家政学分野】調理実習・栄養管理・摂食指導・手工芸 染色・生花 縫製（ミシンでエプロンづくり）
【文化・芸術分野】音楽療法 音楽 歌唱 器楽演奏 鑑賞 作曲 身体表現・ダンス 創作発表 美術 絵画 粘土 版画 シルクスクリーン 鑑賞 美術館巡り（オンライン）・書道・演劇 映画鑑賞
【健康・スポーツ分野】体操 健康管理 体への取り組み ボッチャ ハンドサッカー トランポリン フワフワマット 車椅子卓球

【言語・コミュニケーション分野】 ICT機器の活用（視線入力・スイッチ操作等の入力方法の開発と表現活動 トーキングエイド・文字盤などコミュニケーション方法の修得 メールやフェイスブックの活用）ことばの学習
【「自立活動」に関する分野】 身体の動き 健康の保持 感覚の活用・人間関係の形成 アロマセラピー スヌーズレン
【伝統文化分野】 季節の行事 獅子舞 豆まき 夏祭り
【校外学習】 社会見学 乗車体験 図書館 買い物 レストランで食事

人文科学分野		
文学:読書活動 絵本「はっぱ」:お母さんとの合作です。散歩に行って「はっぱ」を集めて作りました	文学/創作 絵本作り:自分で描いた絵のペーパーサートを動かし、おしゃべりしながら話を作っていきます	文学:創作活動 意思伝達装置「伝の心」使用で創作『熊のお話 作品集』
		
文化・芸術分野		
英語の学習 Duolingo というアプリで、6月からは自宅の説明の会話。	音楽:音楽療法 ロールピアノで即興演奏。頭、腕、いろんなところを使って音を出します。	音楽:器楽合奏 大好きな SnowMan の曲を演奏しています。
		
音楽:器楽合奏 iPhone リアルパーカッション	音楽:歌唱 やりたい曲を指さして伝えます	美術:粘土 粘土は、感触が楽しい！
		

書道 書き初めて、墨をすって『辰』を書いてみました 	国語:書道 PCで書道:ペイントで「外出」という言葉を書きました! 	
社会科学分野		
地理:世界 ヨーロッパの街歩きを動画で観ています。 	地理:日本 動画を見て都道府県の学習をしています。めざせ、日本一周。 	情報:コミュニケーション iPadではたるパントリーの受付 
自然科学分野		
生物:季節の植物 	生物:昆虫 	科学:電気「電気をつくろう」 
家政学分野		
手工芸:毛糸でアート 色を選びカット、貼り付け。 	染色 右目でピエゾスイッチを動かし、色抜き剤を使って模様を付け。 	調理:ポテトサラダ作り 茹でたポテトに野菜もまぜて! 

(2) 各分野の実際について

【人文科学分野】

文学	読書活動	Tさん(絵本「にじいろのしまうま」「もぐたさんのあたらしいおへや」) Iさん(「星の王子様」「富士山うたごよみ」) Isさん(絵本 季節に合わせて) Iwさん(「わいわい文庫」から。読後はあらすじと感想を自分で書く) Sさん(「わいわい文庫」から選択。読後はあらすじと感想を自分で書く) Sさん(本読み) Yさん(絵本。内容や言葉が持っている情景を大切に) Nさん(本読み)
	創作活動	Yさん(小説は題材等、自由に選び伝の心で綴り、文章表現する) Nさん(自分で描いた登場人物を選んで、背景の中でおしゃべりしたことを元に絵本作りする)
外国語		Mさん(英語 Doulingo アプリ使用)

【人文科学分野】(国語・数学・美術・音楽の授業)文学 読書活動(絵本の読み聞かせ)創作活動(俳句・短歌・詩・絵本・小説)外国語(英語)

【文化・芸術分野】

音楽	音楽療法	Kさん(歌、ふれあい、楽器活動)
	鑑賞	Iさん(歌、メロディに内部感覚高揚) Aさん(歌、楽器、鑑賞) Sさん(季節の歌) Yさん(季節の歌)
	器楽演奏	Tさん(歌に合わせてスイッチで太鼓を叩く) Yさん(曲に合わせて楽器を iPhone パーカッションアプリで選び、合奏を楽しむ) Iさん(動画と一緒にリズムを感じて表現 ウクレレを左手の指先で弾く) Iwさん(キーボード、ベルなど iPad で音を出し、BGM や歌に合わせて演奏) Sさん(動画の音楽を聴く、マラカスをもち、手首を動かして鳴らす) Mさん(好きな歌謡曲や童謡に合わせて iPad アプリの楽器演奏) Yさん(歌に合わせて合奏) Nさん(好きな歌に合わせて楽器を鳴らす)
	歌唱	Saさん(ウクレレ演奏を聴きながら、口ずさむ、歌う) Iwさん(音楽プレイヤーの曲リクエストして聴く、一緒に歌う) Neさん(歌いたい歌を選んで一緒に歌う歌は、歌詞カードの表紙に絵を描く or 色塗りし作る)
	作曲	Syさん(Studio ftn Score9.59 で写譜、オリジナル曲作り)
美術	絵画	Syさん(Word のオートシェイプで作品 『野菜』) Sさん(描画)
	粘土・感触	Iwさん(粘土、紙、果物などに触れてみる感触や香りを楽しむ)
	工作	Tさん(花かご作り→プレゼント) Iさん(フェルト作り→しおり作る) Sさん(和紙作り)
	版画・染色 シルクスクリーン	Aさん(野菜のスタンプ→カード作り) Sさん(版画、染色)
	鑑賞 美術館巡り	Idさん(観たい美術展、美術館動画を選んで絵画鑑賞。好きな絵を選び、作者、時代、描かれた人物など、さらに調べて深める)

書道		SYさん(書道)
演劇・ドラマ・映画鑑賞		Idさん(映画、アニメ作品鑑賞『推しの子』『黒執事』など一緒に鑑賞) Yさん(平安時代に関心。大河ドラマの登場人物の心の変化に注目し、時代背景を考える)
身体表現	ダンス	
	自己表現	Tさん(感じたリズムを自己表現)

【文化・芸術分野】音楽療法 音楽 歌唱 器楽演奏 鑑賞 作曲 身体表現・ダンス 創作発表 美術 絵画

粘土 版画 シルクスクリーン 鑑賞 美術館巡り(オンライン)・書道・演劇・映画鑑賞

【自立活動の継続に関する分野】

健康の保持	生活リズム、生活習慣	
	病気の理解、生活管理	
	身体各部の理解、養護	Iさん(ベッド上で手足を動かす、お腹や背中を広げる取組み) Sさん(からだに触れ、感覚や 動き方を知る) Yさん(静的弛緩誘導法による体の学習。おなかや胸・背中を触れるを手足に触れて、関節を動かす。顔を触れる)
	障害特性の理解、生活環境の調整	
	健康状態の維持、改善	Iさん(緊張度が高い部位の弛緩が促す。肩甲骨付近、左肩部位の心地よい弛緩を促す。全体の血行促進按摩(マッサージ、リハビリ)) ISさん(リラクゼーション、マッサージ、姿勢変換、呼吸介助) Iwさん(散歩。心身の健康の保持) Yさん(呼吸に関係するところを触れて、健康状態の維持・改善)
心理的な安定	情緒の安定	Yさん(笑いヨガ。笑い声を届けて、心理的な安定を図る)
	状況理解と変化への対応	
	障害による困難を改善・克服する意欲	
人間関係形成	他者との関わりの基礎	Iさん(楽しい気持ち等を表出)
	他者の意図、感情理解	Saさん佐藤亜(感情の読み取りカードを用いて、自分の気持ちや相手の気持ちに気付く)
	自己の理解と行動の調整	
	集団参加の基礎	
環境の把握	感覚の活用	Iさん(感覚教具を活用した学習。ボコボコチェーン引き、スライディングブロック 光あそび) Tさん(YouTube『ビジョントレーニング』フーセン、春、海、などのイラストを追視) Yさん カードゲームでは、右側から、左側から近づくカードに黒目を動かす) Iさん(フェルト作りで、素材の感触の変化を感じて、自ら手を動かしたり、表情や発声で表す) Iwさん(散歩。光や風、外部の音を感じる) Sさん(スライム、紙粘土。感触の違いに気づき、変

		化を楽しむ)
	感覚や認知の特性について理解、対応	
	周囲の状況把握と状況に応じた活用	
	認知や行動の手掛かりになる概念の形成	
身体の動き	姿勢と運動、動作の基本的技能	Sさん(紙コップを重ねたものボールを使って倒す。目と7手の協応。置き方に応じた力の加減を考える
	姿勢保持と運動・動作の補助手段の活用	
	日常生活に必要な基本動作	
	身体の移動能力	
	作業に必要な動作と円滑な遂行	
コミュニケーション	コミュニケーションの基礎能力	Iさん(楽しい気持ち等を表出する
	言語の受容と表出	
	言語形成と活用	
	コミュニケーション手段の選択と活用	
	状況に応じたコミュニケーション	

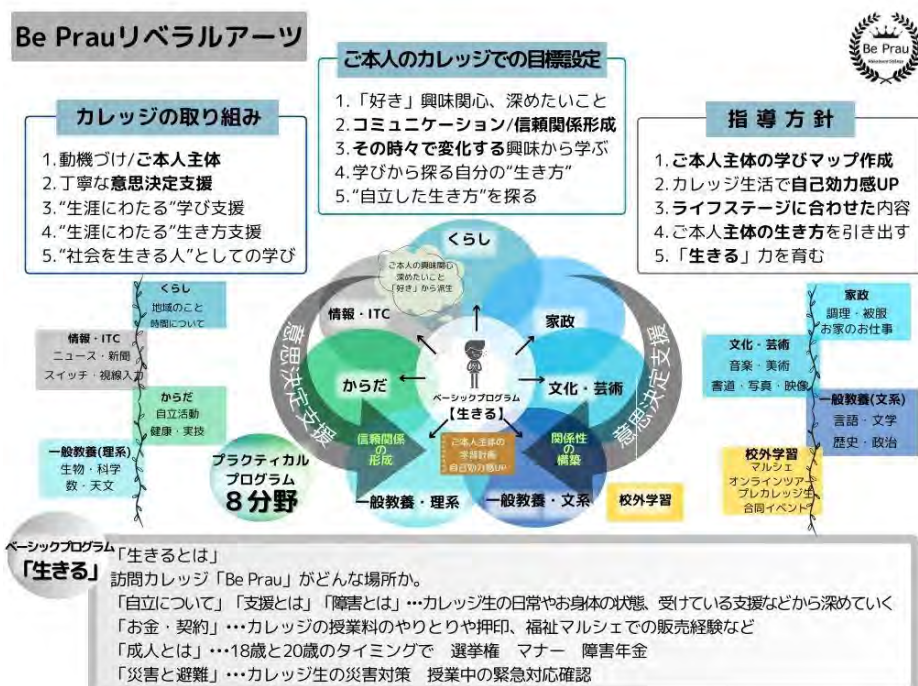
*言語・コミュニケーション分野に含まれる内容はそちらで記述

【自立活動の継続に関する分野】身体の動き 健康の保持 感覚の活用 人間関係の形成 アロマセラピー スヌーズレン

各分野の紹介は、すべてではありませんが、これらを参考にして、内容充実を図りたいと思っています。

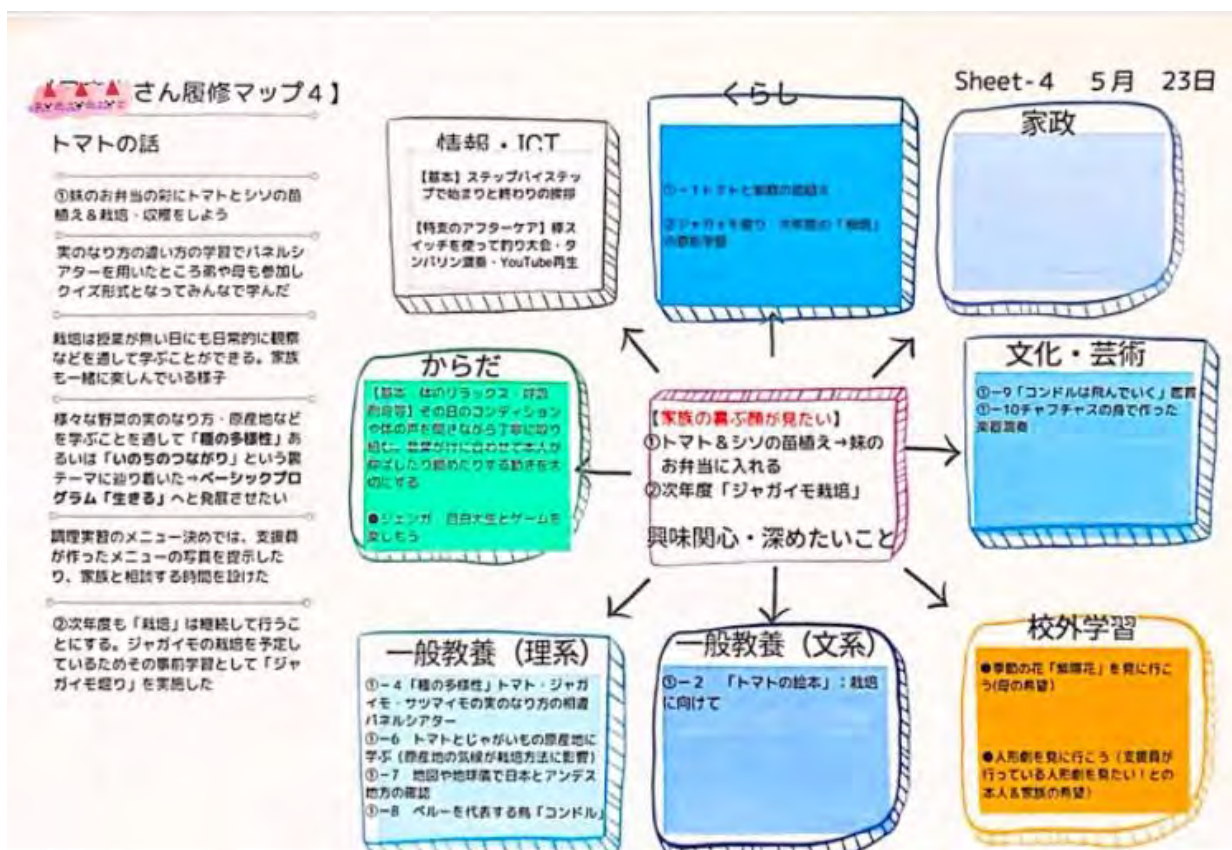
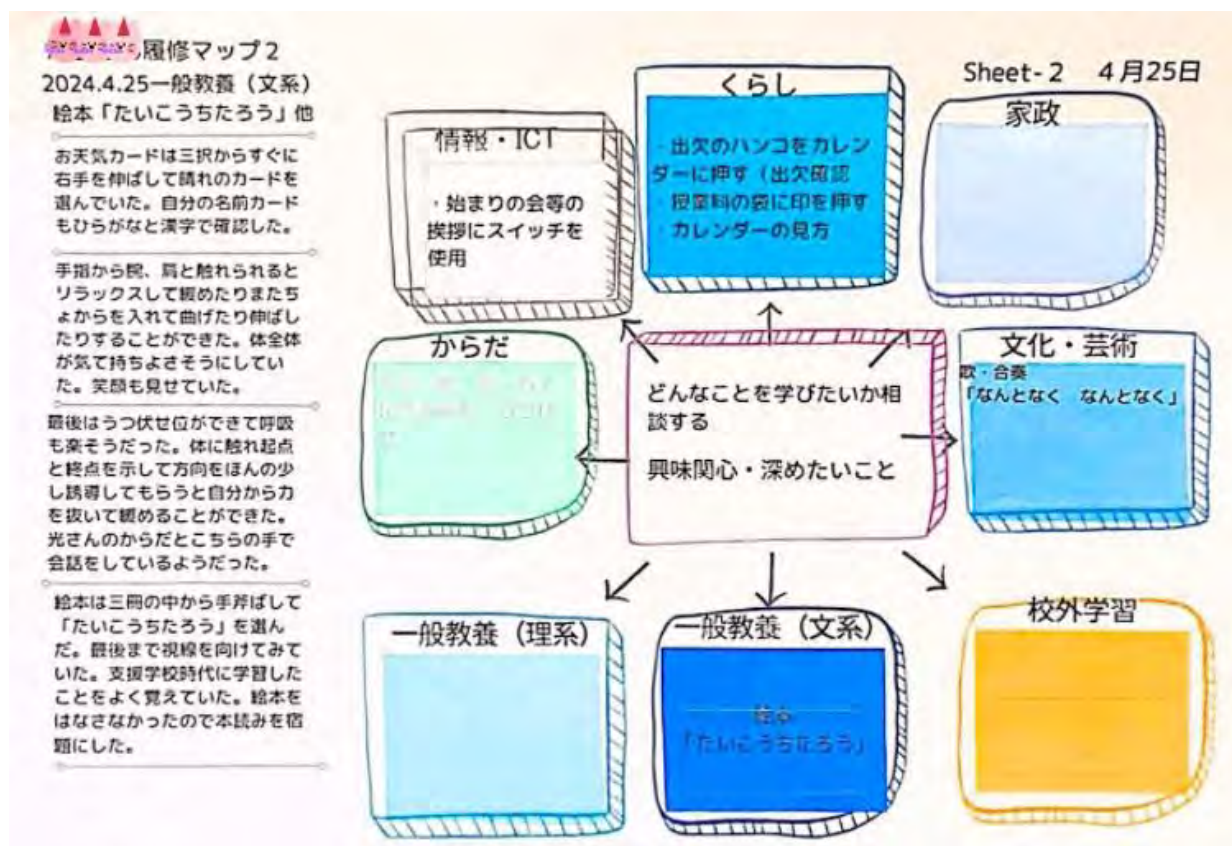
(3) 訪問カレッジ「Be Prau」の実践

「Be Prau リベラルアーツ」は「ご本人主体の学び」である。一律に準備されたプログラムに「主体的に取り組む」のではなく、ご本人の興味関心や好きなことを「学びマップ」の真ん中に置き、そこから学びを進めて、初めて知ったこと、新たに沸いた疑問、誰かの発言などから自然と次の学びに派生していくよう支援する。そして気付けば、さまざまな分野に派生した学びが展開していて、「これまで自分は関心が無いと思っていた分野のこ



とを自然と学んでいた」「この学びとこの学びが実は繋がっていた」という発見を積み重ねていくことで、ご自身が生きている世界が広いこと、そして「この広い世界を生きるわたし」を実感することを目指す。

【Hさん実践事例】



Hさんは2024年4月、カレッジ開校と同時に入学された第1期生である。Hさんが学びマップの真ん中に置いたのは「家族の喜ぶ顔が見たい」という希望であった。そこから何を学ぶかと相談していたところ、ご家族との会話の中で「妹がお弁当を持って登校している」という発言があったことから、「トマトと紫蘇の栽培」をし、収穫したもので妹さんのお弁当に彩をそえようという計画となった。そこからトマトについての学習をする中で実のなり方の違いなどを学び、他の植物にも学習が派生、「種の多様性」というテーマに行きつき、別の植物の収穫体験や長期的に栽培に取り組むこと、産地やその国の文化などを学んだ。



「Be Prau リベラルアーツ」では「社会を生きる人」としての学びとして、多様な他者との協働による学びを大切にしている。目白大学地域連携事業「訪問カレッジサポーター」のご協力により、学生サポーターがカレッジ生の授業に参加したりさまざまなイベントを共に楽しんでいる。また、カレッジ生ご自身が暮らす地域との繋がりを大切に、さいたま市岩槻区はたらく部会の福祉マルシェに出展し、目白大学サポーターと共に活動した。外出困難なカレッジ生やプレカレッジ生が、外でのイベントに参加する際には、「見通しを

持って体調を整える」「楽しみに待つ」という意味がある。また、自ら「学び続けたい」「出会いたい」「地域で自分らしく暮らしたい」という願いを発信できる大切な機会となる。

参加を希望していた3名のカレッジ生、プレカレッジ生がみな体調を整えて準備をし参加することができた。自分が暮らす地域で出展しそこに立つというこれまでにない体験に、最初は緊張した面持ちを見せたが、それぞれがマルシェの意図を理解し役割を果たすことができた。帰宅予定時刻を過ぎても「まだやりたい」という気持ちから長時間滞在した者もいた。また、はじめて顔を合わせる者とも、同じカレッジに集うものとしてコミュニケーションを図ることができた。

目白大学「訪問カレッジサポーター」からは4名の参加があった。Be Prauのマルシェ出展の意図をよく理解した上で、自分たちがサポーターとしてできることは何かと主体的に取り組む様子が見られた。商品の陳列の仕方や、どうしたらBe Prauの取組みが地域の人に伝わるのかということについて具体的な提案があった。カレッジ生に対してはサポーター学生から商品のセールスポイント等の説明をしてもらったり、よその店の見学の付き添いなどを担ってもらった。サポーター学生とBe Prauやカレッジ生の協働は地域をエンパワメントしていくことができると感じる体験となった。また、カレッジ生の母親からは「いつの間にか自分の娘は知り合いがたくさんいて、社会の一員なんだと嬉しく思った」との感想が寄せられた。



4. 考察～学びの履歴書をつくるために～

「重度障害者・生涯学習ネットワーク」では、生涯学習は、余暇活動ではない！キャリア形成の場。かけがえのない人生のかけがえのない時」を、学びたいことを、学ぶ「時」とすることであると考えています。学校卒業後の学びですから、位置づけとしては、「カレッジ活動」です。「カレッジ」としての扱いとするために、その体裁を整える必要があります。

「カレッジの要件」は①カリキュラムがあり、系統的・継続的に学べる年間計画・支援内容・個別の目標・評価を設定している。②専門的な知識・技能のあるスタッフがいる。③健康で生きがいのある生活のために、自らの個性や得意分野を生かす環境がある。④希望と夢の実現に力を尽くす。と考えています。系統性のあるカレッジ活動の体裁を整え、今後のために、学習プログラムの類型化を試みてみました。下記の類型をベースにして、実際を検証してみました。実施してみて「学びの履歴書」の可能性が大きいことが分かりました。更なる活用を考えています。_____

Ⅲ 運営・地域連携

1. 研究テーマ

これまでのネット会員による訪問カレッジの実践方法を分類すると次の3通りに分けられた。

- ①自治体の社会教育としての「訪問型生涯学習支援」
- ②NPO 等が主体の法定外事業としての「訪問型生涯学習支援」
- ③訪問系の障害福祉サービスを活用した「訪問型生涯学習支援」

①は日野市の委託事業である「日野市障害者訪問学級」である。②は NPO 法人の法定外事業として行われている「訪問カレッジ@希林館」「訪問大学おおきなき」「訪問カレッジ Enjoy かながわ」などである。③は学習支援員が介護職員の資格をとり、居宅介護（身体介護）や重度訪問介護など障害福祉サービスとして学生を訪問し、学習支援の部分は障害福祉サービス外のオプションとして提供している「訪問療育いるか」「訪問カレッジ@キーぼ岡山」、就労継続支援 B 型事業「みんなの大学校」などである。

訪問カレッジで学ぶ学生の多くは、人工呼吸器等など濃厚な医療を必要としている重度医療的ケア者であるため、学習内容の充実とともに緊急時対応なども踏まえて複数の支援者による対応が必要である。また、学習場面では、成人である学生自身の自立のために、家族等の付添を前提にしない学習支援体制を望む家族の意見を踏まえる必要がある。

家族以外の複数の支援者による学習支援方法としては、次の2通りが行われていた。

- ①学習支援員と障害福祉サービス（重度訪問介護従業者等）の介護職員
- ②学習支援員と大学生やゲストティーチャー

①では、学習支援を行う学習支援員（社会教育、法定外事業）と身体介護（喀痰吸引や経管栄養等を含む）を行う介護職員（重度訪問介護従業者等）とが別制度になるため、障害福祉サービスの重複給付にはあらず、複数名による支援が保障される。このため人工呼吸器が必要な学生も保護者の付添無しに学習が行われていた。

②では、大学のボランティアサークルの学生や市民ボランティア、プロの演奏家などがゲストティーチャーとして同行訪問することによって、同年代の学生との交流や豊かな学びが行われていた。なお、喀痰吸引等の医療的ケアの対応は家族に依頼した。

以上の研究を踏まえて本事業の連携協議会では、「社会教育スキームによる訪問型生涯学習支援の持続可能な事業形態の研究」をテーマに研究を行った。

2. 研究方法

連携協議会を設置し、年3回の連携協議会を開催した。

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事長	ネット会員
	大嶋 尚史	東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課	社会教育

	白川 和彦	日野市中央公民館 高幡台分室	社会教育
	井口啓太郎	文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」 (国立市教育委員会教育部公民館館長補佐・生涯学習課課長補佐兼任)	社会教育
	栗田 昌宗	東京都社会福祉協議会・障害児福祉部会・部会長 (社会福法人天童会・法人事務局事務局長)	社会福祉
	新井 厚子	学校法人 日本教育財団 首都医校 高度看護保健学科	高等教育
	伴 光明	東京都立あきる野学園 校長 (全国特別支援学校肢体不自由教育校長会 理事)	学校教育
	池邊麻由子	一般社団法人東京都肢体不自由児者父母の会連合会・会長	親の会
	有吉万里矢	全国肢体不自由特別支援学校 PTA 連合会・会長 (東京都立光明学園 PTA 会長)	親の会
	安部井聖子	東京都重症心身障害児(者)を守る会・会長	ネット会員
	藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team・代表理事	ネット会員
	相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき・理事長	ネット会員
	大石 恒子	日野市障害者問題を考える会・副代表	ネット会員
	松本 恵里	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン・理事長	ネット会員
事務局	藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team・代表理事	委員兼務
	相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき・理事長	委員兼務
	大石 恒子	日野市障害者問題を考える会・副代表	委員兼務
	松本 恵里	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン・理事長	委員兼務
	下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	

(1) 第1回連携協議会

- 1) 日時 令和6年 6月20日(木) (午後) 13:00~15:00
- 2) 場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-2)
- 3) 内容
 - ①連携協議会の構成員の紹介
 - ②これまでの研究の概要
 - 1) 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム
 - 2) 運営・地域連携 3) 人材育成 4) 理解啓発
 - ③本年度の研究テーマと計画
 - ④日野市障害者訪問学級に学ぶ
 - ⑤協議

(2) 第2回連携協議会

- 1) 日時 令和6年10月12日(土) (午後) 13:00~15:00
- 2) 場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-2)
- 3) 内容
 - ①研究の中間報告
 - 1) 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム
 - 2) 運営・地域連携 3) 人材育成 4) 理解啓発
 - ②新宿区における取り組みに学ぶ a) 専門学校との連携 b) 福祉制度の活用
 - ③協議

(3) 第3回連携協議会

- 1) 日時 令和7年 2月 1日(土) (午後) 13:00~15:00

2) 場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-2)

3) 内容

①研究のまとめと提言

1) 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

2) 運営・地域連携 3) 人材育成 4) 理解啓発

②協議

3. 記録

研究テーマ「社会教育スキームによる訪問型生涯学習支援の持続可能な事業形態の研究」

記録 相澤 純一(NPO 法人訪問大学おおきなき・理事長)

(1) 第1回連携協議会

大嶋さん: 重度障害のある方のニーズ、学びたい人がいることを理解できた。R4 年の文科省の委託事業ではコンソーシアムを作る支援団体の横のつながりで、自然発生的に新たな事業が生まれた。新しいものを作るのではなく既存の健常の方の教育プログラムを活用することが考えられる。そのプログラムをインクルーシブな形にするのが持続可能な事業形態にしていくキープポイントになりそうだ。

白川さん: 市区町村と東京都と国がどう結びつき、続けられるのか、仕組みがあると良い。学びあいが継続できる街にしたい。その中に障がいのある方の学びもある。持続可能なものにするのが大事なテーマ。どういうふうにとできるのか、考えていきたい。

井口さん: 委託事業で神奈川県の仕事を得られたのは大きな進歩。市区町村、都道府県の仕事を作っていくのが大事。ボランティア人材、講師をどう確保していくのが課題になる。大学生側の学びもあるはず。当事者と出会う何を学んでいるか研究していく必要もある。日野市の事業の継続を見て、後押しする国や東京都と連携した仕事を作っていくのが次の課題。東京都は特別支援学校のネットワークを活かせないか。

*下川: 大学生のインターンシップの活用に踏み込んでいくことも考えている。しかし学生は忙しい。

栗田さん: まだ知られていないことが多く、啓発していく必要性を感じている。知らない人にどうアプローチしていくか。予算的には、療育と教育で見えない壁がある。療育を通じてとするとスムーズにいくことがあるが、教育とどうつなげていくかが課題。

新井さん: 既存の物を活用することで、できることを考える視点で皆さんの話を聞いた。学生の考え方が変化し、人とかかわり避ける傾向がある。しかし、インターネットには興味がある。学生の孤立化を避け、人と触れ合うことを大事にして、いろいろな人がいることを知ってもらい、学生の質を高めていきたい。

*下川: 学生と大学生の学び合う win-win の関係になるといい。

伴 さん: あきる野学園では、あきるのクラブが月1回、土曜日の活動をしてきて25年になる。保護者と教員の有志がやってきた。40歳~小学生まで月1回集まっている。来れない人のことを考えると訪問型をやっていく必要がある。

類型化は大事。サイエンスやアートにこだわっていくことが大事。人材育成について、文科省には介護等体験や初任者研修があるが、訪問型の組織も含むといい。インクルーシブな流れが大事。市民が芸術に触れ教養を高めるのと同じ位置づけで考えたい。

池邊さん: ICT 機器の活用について、年齢が高い人については、学んでこれなかった実態がある。卒後から時間がたってしまった人も、もう1回学べるといい。意思決定について支援が成立した上で、学びが続けられたらいい。親亡き後を支えていただけるのは心強い。

*下川: 令和6年度の障害福祉サービス等報酬改定で意思決定支援が含まれた。

有吉さん: 学び続けることは大事。卒業後に断ち切れるのは問題。訪問型は自宅に限られると思っていた

が、施設への訪問や放課後活動への参加も含まれることを知った。学校卒業後の障害者の学びの支援推進事業の委員になっているが、ねっこのところと同じ。保護者が分かりにくいのが現状、パソコンで検索したら実践が出てくるといい。同年代の係わりは大事に思う。若い人に働きかけていきたい。受益者負担の話があったが、お金を出しても学びたいという人はいる。

*下川：日中活動は施設が担う。通えなくなると生活介護は終わりにになってしまう。コロナ期に訪問が可能になったが、5類になって、またできなくなってしまった。

安部井さん：財政的な支援と人材の確保が課題。厚生労働省と文科省が手を携えることと、都は国に先駆けてやっていくことができるのではないかと。親の会として働きかけ続ける。

藤原さん：新宿養護学校があり、他区と比べると地域連携しやすい。学生にいきなり対面を求めるのは難しいが、教員に引率してもらえるとやりやすい。新宿養護の体育館で集団学習を行い、行政の配慮で移動支援を利用できるようにしていただき、行政との連携で生涯学習が実現した。運営側の世代交代は大きな課題。

*下川：新宿区の障害福祉課の取り組みは意義がある。

相澤さん：日野市や中野区の取り組みがあり、大田区にも障害者訪問学級があったが廃止に。障害の重い方の声が行政に届いていなかった。日野市のような委託型も考えればできないことではない。制度化に向けて、まだまだ伝えていくこと、発信を続けていく必要がある。

大石さん：八王子東特別支援学校の卒業生もいるが、日野市限定なので八王子市民の場合は断らなければならない。大学生の参加が難しく少なくなっている。いきなり訪問するのは難しいが、遠足について行ってもらおうと安心して参加でき、大学生が喜んでいて。複数対複数でやっていけば、ハードルが下がりかわりやすい。

文科省（福澤さん）：持続可能という点では、人材、財政面も、まだまだモデル事業の段階で、全国でどう展開していくか課題がある。しかし、国も訪問型を明記している。認知や周知面でも、もっと広げたい。予算を拡充していくためのヒントをいただいた。人材育成については、ハードルを下げ、重い障害のある人に関わる意味、訪問型の学習があることを知っていただき、自分でもできると思っていたきたい。活動支援団体について、視点を変えて、たとえば不登校支援の団体とつながる等、他団体と一緒にできることもあるかもしれない。

文科省（佐藤さん）：今後、自走化が大事。厳しい財政の中、限られたものをどう活用していくか、どう分け合っていくか。障害者学習支援推進室も6年目。これからは発信や啓発が課題になりそうだ。室としてポータルサイトを作ろうとしている、都道府県につながり各団体につながる発信をしていきたい。

*下川：次回から実践を通して深めていきたい、

(2) 第2回連携協議会

大嶋さん：R5年にコンソーシアムを立ちあげ、中野区の社会福祉法人に参加していただいている。事業の運営費については東京都福祉局から助成金をいただき、地域の包括的な支援センターとして活動。実際の事業については文化庁や文科省から助成金をもらってやっている。行政の縦割りの中で、複数のところからの支援で運営しているところがあることが驚き。中間支援組織のような形で省庁の枠を超えた利用の仕方を支えていきたい。そういった団体が集まるコンソーシアムやネットワークを作るのが東京都の役割だと思う。

白川さん：現場とのつながり43年続いている。日野市障害者訪問学級は来年度400万円超の予算だが、どこまで継続できるかが課題。厚労省のモデル事業は興味深い。

井口さん：新宿区が地域生活支援事業を活用しながら自治体の事業等としてやっていることは日野市のような社会教育の中での取り組みとともに重要。今回、厚労省の生涯学習のモデル事業は隔世の感がある。厚労省はこれまで、「生涯学習は文科省」と言っていたので大きな進展。民間のボランタ

リーの実践が行われている現状では福祉でも教育でも予算化されることが重要。当事者が要望を届けていき、まずは福祉の予算を獲得していくのは近道になる。

下川：井口さんは文科省の生涯学習のアドバイザー。

有吉さん：できること、広げること、つなげることを実行していきたい。ネットワークの各団体の基盤整備を特に行政にお願いしたい。障害児を育てていると自分を振り返る時間もない。進路指導の中で説明を受けるが生涯学習支援も同等のものとして入れて頂くことは大事。行政の案内にも入れてほしい。

下川：全肢 P 連が2000年頃、「いつまで待機すればいいの」という手記を文科省、厚労省に提出。マイノリティの医療的ケアの子どもたちのことを考えてもらった。高等部の訪問学級を作る時も同じように感じた。人数が少ないから後回しでいいわけではない。

新井さん：保健師は看護と療育の支援をする。見て広げてつなげる。障害を持った子どもは抱え込んでしまい保健師は個別に入っていくので閉ざされた環境になってしまうが、保健師は今までの状況を数値として見える化し統計を取って形にしていけるのが大事でないか。介護福祉士は高齢者のためだけではない。小児の医療的ケアも研修に入れるようにしている。どんどん世の中に広げていくことが必要。

成田：連携協議会でリーフレットがあることでお配りする機会があり5000部を一月で配れた。リーフレットがあることで戸を叩けた。医療、福祉、教育で1万以上配布。

下川：看護師の国家試験の中に学校や医療的ケア児等が昨年から入った。

伴 さん：学校が休みの時に学校でない組織の人が施設を使うのは壁が高い、学校を様々なことで使いたいという要望に気持ちの上では答えていきたい。しかし、現在、教員にプラスアルファの仕事を求めるのは難しい。東京都、市区町村の教育委員会の方針になる。今回の協議が提言を含むものとする、学校を使いたいのであれば、どの権限でどのように使えるようにしたらいいか方針を出してほしい。学校は体力が落ちているが、具体的になると考えられる。

下川：学校はコミュニティのセンターとしてあったのだが、難しくなっている。

栗田さん：全国の日中活動についての協議会に参加した。医療的ケアがメインの課題になっていた。地方では医療的ケアの支援の基盤がなく東京に来てしまう。生涯学習のことは、厚労省がくさびを打ったことになる。地方は支援の基盤がなく東京の話になる。新宿が最新。

藤原さん：新宿は恵まれている。生涯学習に取り組んでいるのは、まだ17団体、全国にあって下から上に突き上げ伝わっていく温度感がないと難しい。永福学園の進路対策の先生とつながり、生活介護に通えない学生には、進路の選択肢としてひまわり Home College を紹介していただく。しかし体力がないので新宿区に限定している。活動資金については助成金を1年単位で申請しているが、ものすごく負担がある。安定した基盤ではないので、行政に予算をお願いしたい。

相澤さん：講師（学習支援員）の人材や後継者を探すことに苦労している。専門性という意味では退職教員を中心にお願いしているが、引き受けてくださる方が見つからない。一方、協力していただいている大学の学生の見学があると、訪問授業を受けている彼らの目が輝く。若い力も必要で、専門性とともに同年代の人とのかかわりも大切である。

大石さん：日野市の障害者訪問学級は公民館活動に管轄が移動している。知的障害の方の青年学級もやっているが発想が違う。障害のない人と一緒に楽しむ内容なので、障害の重い方が同じ立場で楽しむのは難しい。人材育成の面では遠足に来ていただいた理学療法士の専門学校の方が実際の医療的ケアの場面を見れてよかったという。大学の教育学部の方が興味を持ち、講師になっていただいた。今後につながる連携は口コミで顔が見える形で誘っていくのもよい。

石丸さん：社会教育分野は補助金というお金の出方が多く、これで継続していくのには限界がある。個人的な見解であるが、国分寺市のみんなの大学校の活動がモデルになる。就労継続支援 B 型の介護報酬を取っている。居宅訪問型生活介護が可能になるのではないかと期待している。介護報酬を取

れば経営基盤ができるのではないか。厚労省の方に考えてもらいたいし皆さんの要望をいただきたい。

下川：生涯学習の希望者は多い。訪問型生活介護は進むといいが、医療的ケア者の定義がなく、人数が分からないため予算付けもできない。全国組織での調査が必要。ニーズを掘り起こし人数を把握できれば予算化できる。施設、病院に行っている方も多いが、まずは在宅でどこにも行けない人の調査が必要。

(3) 第3回連携協議会

大嶋さん：本日欠席

白川さん：厚労省の事業について、今後注目していきたい。

井口さん：文科省の委託事業はモデル研究で7年やっていて、あと何年やるのか議論になっていた。補助事業化をどう実現していくのか内部でずっと議論していた。総合教育政策局の補助事業は、地域と学校との連携しかない。障害者の生涯学習については都道府県や基礎自治体で生涯学習を実施している団体が極めて少ないしやっても予算が少なく、補助事業化は手続き的に難しい。最低まだ5年位はかかる。社会教育法等を根拠に基礎自治体の社会教育行政が担っていくのは理想的だが、重度障害者の生涯学習については社会教育行政の職員や公民館等にノウハウがない。現実的にはネットワーク団体が増えて団体の事業に補助が下りるとか委託していくなどが現実的。厚生労働省の事業を活用して実態を作っていく方が現実的かもしれない。今まで考えられなかった事業が出てきて大きな進展である。教育でやるべきという人もいるが、まず予算を取り実態を作るのを優先すべき。ネットワークと推進室でも、話し合いをしたらどうか。新規性を打ち出すといい。厚労省の事業では、生活介護事業所の通所できる方を想定していて訪問は想定されていないのがネックになるかもしれない。通所できる方に限定しないように働きかけていくことが早急に必要。文科省の推進室から情報提供していただくといい。

有吉さん：当事者が声を出していく必要がある。要望書を地域に上げている。学びの実り文化祭に参加したが、Be Prau が学びのマップを作られていて、障害の度合いに関わらず就学時から学びのマップがあって生涯学習につながっていくといい。生活介護施設の通所では、15時30分頃に帰宅するが、その後を見てくれるところが必要。在宅の方は対象にならないか。生活介護のスタッフが学びを提供するのではなく、たとえばネットワークの団体が委託を受けてスタッフを派遣することは可能だろうか。制度で縛っていくのではなくみんなが学べて、みんながHappyになれる社会であるといい。

池邊さん：厚労省の生活介護のモデルについて全国の父母の会の連合会で、大人の放課後デイが欲しいという要望が出ていて、厚労省の事業の利用が考えられるという回答もあり、心配がある。放課後等デイサービスは18歳以降使えなくなり、生活介護は15時30分位に終わってしまう。それまで就労していた保護者が仕事を続けられなくなる。生涯学習の活動は、まだ知名度がない。通所している方も生涯学習を求めている仲間を大事にしていく必要がある。医療的ケアがある人だけではないので私たちという声があった。その中に重度の子が入るという考え方も必要だ。

新井さん：教育の現場で学生に対してどうするか考えている。終末期の話があったが、医療を専門とする学生を育てている。日本では福祉と医療を別に考える現状がある。生活していく上で必要なこと、障害のある人の想いや求めているものを見えるように提示していく必要がある。成果が見えるようにしていくことが大事。学生が今後日本を背負っていくために障害者への理解を教育の中で含めていく必要がある。

伴 さん：今日、障害者スポーツのインクルフェスのハンドサッカーをやっているのを見に行った。卒業生チームが参加したが、社会教育の中の活動である。これをやるということがはっきりしていると人が集まりやすいし、社会の人たちも関心を持ってくれる。特別支援学校は、もっと障害のある人の学習を具

体的に示す必要があるのではないかと。学習の内容は多岐に渡り分けにくいがラベリングしたい。生涯にわたって提供するものは何か、目的がはっきりするといい。何を用意できるのかアピールしているといい。

栗田さん：厚労省で予算が付いたことで、今後の発展に期待したい。やはり認知度が低いことが課題。知的障害の方と学習は近い。重心となると教育と結びつかない部分があるのかもしれないと思われるが、どのようにつなげていくと事業が拡大していくのか考えていきたい。

安部井さん：本日欠席

藤原さん：厚労省の事業について新宿でどんなことが取り組めるか。どうやったら受託できるのか、ヒントが欲しい。学校を卒業する時点で詳しい引継ぎ資料を作ってくれるが生活介護で生かせていない。マンパワー的に無理。モデル事業で外部から入ってくるのなら資料が生かせるか。新宿でもひまわり Project が取り組めたらいいと思っている。

相澤さん：関心を持ってくださる方がまだまだ少なく、市区町村の行政も障害の重い人の生涯学習のニーズを把握できていない。訪問大学おおきなきも人材の面で不安を抱えている。文科省に推進室が立ち上がって、生涯学習を推進し始めた頃に大田区は逆に障害者訪問学級を中止してしまった。日野市や中野区のような行政の取り組みを広げていくために、さらに声を大きくし、裾野を広げたい。

大石さん：学生のボランティアが講師で2人来てくれていて講師料を払っている。学生ボランティアをお願いしたいが学生は忙しい。交通費、講師料が出ているのは大事で次の方を見つけたい。日野市と共催で講師養成講座をやっている。この講座を今後も継続していきたい。訪問教育の会長だった御子柴先生が立ち上げて43年続けてきたが、日野市から応援を受けていることで成り立っている。

松本さん：担い手がいないのが問題である。厚労省の事業も誰が担っていくかが課題になるのではないかと。私たちの地道な活動は学びの实りのようにイベント化することで色あせてしまう面がある。もっと地道で面白いものであることを伝えていきたい。教員希望の方も少なくなっているが、この仕事の面白さを伝えたい。ネットワークの中で、または外部講師を頼むかして研修会をするのはどうか。ホームページを充実したらどうか。時間がかかるが、SNS を通じてボランティアをはじめ若い人にも手伝ってもらって、関わる人を増やしていく。予算は出るだろうか。

成田さん：神奈川は県との協働事業として今年度から行っている。一番困難な方の生涯学習を担うことで神奈川県全体の障害のある方の生涯学習を推進することに貢献できると考えている。特別支援教育課や生涯学習課とも連携している。進路指導担当の方の研修会でも「生き方支援」として説明している。特別支援学校との連携では在校生のプレカレッジもやりたいし、PTA や教職員対象のミニ講演もやりたい。県立の歴史博物館や図書館を利用できない方の教材作成や、関心のある公民館の方と次年度に向けて話をする場も作れた。でも、障害の重い人とかかわったことがないので、関心があってもどうしたらいいかわからない人が多い。ボランティアとしてどうかかわれるか、紹介ビデオを作って広めていっている。全県を対象としているので、自分たちだけではできないが一緒に考えていくことはできる。どう地域と連携していくかを考えていきたい。

4. 考察

本年度国の新しい動きとして「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業 令和6年度補正予算」が予算 1.0 億円で認められたことがあげられる。厚生労働省の日中活動では、これまで「学び」「学習」のことは、NG ワードとして扱われていたが、今回の厚生労働省の施策に「生涯学習」が入ったことは画期的なできごとである。日中活動に参加する利用者に直接サービスとして届く事業であり、モデル事業後に一般事業化した際、例えば職員配置やプログラム自体を評価した加算という形が想定され、わかりやすい。厚生労働省のスキーム図では、「通所」している利用者とするが、通えなくなった利用者に対して通所施設から職員を派遣する、すなわち訪問型（アウトリーチ）もモデルの中で実施しも考えられる。

特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業 令和6年度補正予算 1.0 億円

厚生労働省障害保健福祉部 障害福祉課

施策名：特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業

令和6年度補正予算案 1.0億円

障害保健福祉部
障害福祉課
(内線3091)

① 施策の目的

重症心身障害のある方が特別支援学校卒業後に利用する生活介護において、生涯学習の機会をサービス提供の中で提供することで、重度の障害のある方の生活能力の向上と共生社会の実現を図る。

② 対策の柱との関係

I	II	III
		○

③ 施策の概要

18歳を境にして、特別支援学級、特別支援学校といった学びの場が終了し、重度の障害のある方は、日中活動の場として生活介護を利用する方が多い状況であるが、現在、生活介護の中では、学習の機会の場を提供しているケースはほとんどないため、関係者からは生活介護においても生涯学習の機会が求められている。
このため、生活介護において、特別支援学校教員OB等の雇用やICT機器の導入等により、生涯学習を実施するモデル事業を実施する。

④ 施策のスキーム図、実施要件(対象、補助率等)等



⑤ 施策の対象・成果イメージ(経済効果、雇用の下支え・創出効果、波及プロセスを含む)

重度の障害のある方も特別支援学校卒業後も生涯学習の場が広がり、生活能力の向上や共生社会の実現に資する。

このような厚生労働省の動きに対して、本研究のテーマである「社会教育スキームによる訪問型生涯学習支援の持続可能な事業形態の研究」を考えた場合、その根拠としては、社会教育法であるが、これは理念法であり、地方公共団体における努力義務である。

文部科学総事業「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」は、障害者の生涯学習について、学校から社会への移行期や人生の各ステージにおける効果的な学習に係る具体的な学習プログラムや持続可能な実施体制等に関する実証的な研究開発を行うため、平成 30 年度より実践研究事業を開始したものの、モデル事業から一般事業への着地点は見えない。

そこで、連携協議会の中で、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の制度化に向けた提言骨子について、次年度以降に正式に提案するための協議を行った。内容は、「VI 研究のまとめと提言(案)」として、報告する。

■社会教育法(国及び地方公共団体の任務)

第3条 国及び地方公共団体は、この法律及び他の法令の定めるところにより、社会教育の奨励に必要な施設の設置及び運営、集会の開催、資料の作製、頒布その他の方法により、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するように努めなければならない。

2国及び地方公共団体は、前項の任務を行うに当たっては、国民の学習に対する多様な需要を踏まえ、これに適切に対応するために必要な学習の機会の提供及びその奨励を行うことにより、生涯学習の振興に寄与することとなるよう努めるものとする。

■「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」

平成 30～令和元年度「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究事業」について
令和 2～令和 4 年度「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」について
令和 5～令和 6 年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」について
⇒研究・モデル事業から一般事業化への着地点

IV 人材育成

1. これまでの研究の到達点と課題

これまでの研究により、訪問カレッジの学生の学びを支援する学習支援員には、特別支援学校教員の他に①市民、②専門家、③学生が担当していることを明らかにし、高等教育との連携におけるインターシップなど大学生ボランティアを中心に人材育成について研究を行ってきた。

今年度は、令和5年度の大学生のボランティアに関する研究の一定の成果を受けて、現在学生ボランティアなどを派遣するなど関係する専門学校・大学等の受け入れについて、可能な要因・条件などを探る。

2. 方法

ネット会員のうち、「日野市障害者訪問学級」「NPO法人ひまわり Project Team」「NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」のそれぞれの団体の行っている人材育成に関する取り組みを収集し、人材育成の在り方を検討する。

コーディネータは、地域の中での支援者の人材育成を図る。具体的には、特別支援学校やPTA等への情報提供、市民への学習支援員の募集やカレッジ「学生」とのマッチング、研修の支援等を行う。また、地域の社会教育資源の活用に取り組む。

3. 結果

(1) 各団体の今年度の取り組みの経過とまとめ

1) 日野市障害者訪問学級（日野市障害者問題を考える会）」

①はじめに

2025年、日野市障害者訪問学級は発足から44年目を迎えようとしている。市内在住で一人では移動が困難で義務教育終了後も学び続けたいという方を対象に、1981年から日野市教育委員会から「日野市障害者問題を考える会」に委託する形で実現し、今日に至っている活動である。人材育成に照らしてどのような研修があったのか調べてみると、講師向け（学習支援員）にその時々に応じた内容で研修会を行っていたことがわかった。（例 1999年度「教育とは何か？」島田療育園施設見学、2000年度「視覚障害・聴覚障害とは？」、2004年度「車椅子体験」、2005年度には明星大学めばえの会と勉強会など）

2007年度、初めて市との共催で講師養成講座が開かれるようになり、今日に至っている。講座の内容もその年の世相や学級生の実態を反映するものになってきた。例えば、2011年度「重度障害者について」、2012年度「発達障害について」、2013年度「3.11から学ぶ」、2017年度「ポッチャ大会」2018年「ポッチャ大会+福祉機器を使った支援」。コロナ禍の2020年度はオンラインで動画での訪問学級の現状+映画「普通に生きる」映画作家貞末麻哉子氏講演、2021年度は、「ICT機器を使ったコミュニケーション支援+訪問学級の日常授業風景」というテーマを設定してきた。

②講師養成講座から「ハートフル♡サポーターになりませんか？」に名称を変更する

これまで毎年、市との共催で日野市の広報に講座を知らせ、参加者を募ってきた。講座の内容は毎年とても好評であるが、コロナ禍以降、市民の講座への参加者が少なくなってきたのが現状。そこで、2022年度からはシンプルに訪問学級のことを知ってもらい、講師という目線からこんなにもやりがいのある楽しい活動の様子をもっと沢山の人の人知ってもらえたら、という思いから「ハートフル♡サポーターになりませんか？」と名称を変えて実施することにした。

③日野市障害者訪問学級の講師陣の特徴

特別支援学校の退職教員だけではなく、広報を見て「ハートフル♡サポーターになりませんか？」（講師養成講座）に出席して講師になった市民の方々も少なくはない。保護者からの要望としては、障害者への理解と関わってみようという意欲のある人に依頼したいという思いがあり、日野市訪問学級では講師に資格は問わない。そのため講師は多種多様な仕事を抱えている現役世代も半数近くはおり、また半数以上はベテラン講師で高齢化という問題にも直面している。訪問学級発足当時から長い間、明星大学のボランティアサークル「めばえの会」の学生が講師となって各家庭に訪問していた時代があったが、2015年度に同サークルは活動を取りやめたため、その後は同世代との関わりが限られてしまった。ただ2023年度に単発な行事（遠足）にボランティア学生が新たに参加してくれた。学級生との関わりはお互いにとって有意義な出逢いとなった。その時のボランティアの1名は、訪問学級の講師となっている（学生講師は現在2名）。

④「ハートフル♡サポーターになりませんか」の内容

3年前に改称してからの講座の紹介である。講座のパターンは毎年同じで、2部構成で実施してきた。第1部は「学級生の活動の様子」を、参加した講師が「講師になったきっかけ」「学級生の活動に活かされたことや講師になってよかったと思うこと」を講師の目線から報告するもの。

訪問学級の活動をまだ知らない方々に初めて知ってもらう機会であるが、講師同士にとっても他の講師を知る機会でもあり、どのような授業を行っているのかを学ぶ場にもなっている。

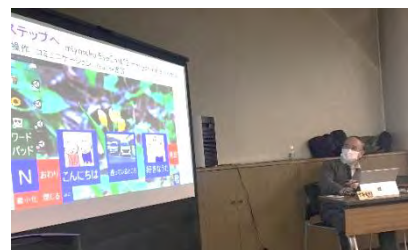
第2部は年度毎にテーマを掲げて実施してきた。3年間の学びのテーマは以下の通り。

■2022年度 テーマ：「ICT機器を使ったコミュニケーション支援」（講師：中島重則先生）

<外部参加者 11名+内部17名 計28名>

視線入力の実際：重度重複の障害をもつ学級生への視線入力を使った取り組みを通して、好きな動画に注目するようになっていくまでの試行錯誤の過程を紹介。

<講座終了後に2名が講師登録をされた>



■2023年度 テーマ：「楽しもう！心をほぐす音楽体験」（講師：水野豪先生・関原彩子先生）

<外部参加者 5名+内部16名 計21名>

訪問学級の講師である音楽療法士の2人が講師となり、マラカスや鈴を手にして鳴らしていくうちに、音が重なりハーモニーになり自然に



心が開放されて、誰もが笑顔になっていく楽しい場を共有できた。

<講座をきっかけに1名が講師となった>

■2024年度 テーマ:「障害のある人もない人も楽しいアート体験」(講師:豊島隆久先生)

<外部参加者 14名+内部18名 計32名>実際に講師として学級生と取り組んできた豊島先生のアイデアと沢山の教材紹介に目を奪われ、参加者が楽しくアートを体験できた。外部参加が多く集まった。



⑤2024年度の講座での手ごたえ

コロナ禍を過ぎてようやく人が集まり出してきたということもあるが、市の管轄が生涯学習課からより身近な地域に根差した学びの場である「中央公民館」に移管、訪問学級の活動をより強く後押ししてくれたことが大きいと感じられた。それは集まった市民参加者が、中央公民館周辺地域の方々が多くいらしたことからも感じられた。講座を終えて講師登録された方が2名+検討中の方2名もいらした。今回、市の公式LINEでこの講座のことをアップしたことは非常に有効だった。参加者に講座を何で知ったか?を問うアンケートでは<LINE4名、広報2名、チラシ1名、知り合いに誘われて2名という結果>公式ラインが、興味のある方々の目に留まりやすかったと思われる。

また、何から講座を知ったか?注目すべき点には、地域の特別支援学校PTAのLINEにも講座が紹介されたことだ。

「日野市では特別支援学校卒業生の学びの場として、訪問学級を行っています。本校卒業生の先輩方も多く参加されている事業です。「ハートフルのサポーター」は訪問学級の派遣講師です。今回ご案内する講座は講師育成を目的としていますが、訪問学級でどんな活動をしているのかを知るための見学もOKだそうです。…」という紹介がされていたそうである。障害児を抱え卒業後を見据える保護者3名の方が参加してくださっていた。

アンケートからの感想を紹介:「活動を初めて知った」という方の中でも次の感想を紹介する。

「LINEを見てあまり深く考えずに参加した。最初はわけがわからず、もしかしたらハードルが高いのかと思ってしまった。(学級生の)お母様から直接お話が聞けたこと、何を求められているかがわかってよかった」ということが書かれていた。

お母様のお話とは、「講師は資格とかすごいことができることとかない。助力をしていただければいい。ある講師の方は本を10冊持って来て読んでくださった。過去には明星大学の学生さんが5名見えて、5レインジャーになってくれたこともある。山坂を車椅子で登らせてくれたことも。多種多様な方が来てくださった。うちの子が笑ってくれる顔を見にきてくれるだけでもよいです」

お話をくださった保護者に感謝の念と、同時にきっとどの講師も講師を続けている理由は、正にこの学級生の笑顔に他ならないかと。講座では、講師陣もおのずと笑顔で活き活きと学級生のことを語っていた。その様子から参加者からのアンケートで「講師が楽しみながら取り組み、学級生も楽しんでいる様子が

わかった」とあり、相互に楽しんで学び合っているのが訪問学級の良いところである。

⑥今後に向けての課題

ハートフル・サポーターのサポーターはいるのか?という問いかけがあった。一人で訪問するより複数で当たれるようにすることで内容や活動の相談ができることがメリットである。しかし、講師の不足のためまだ一人での訪問体制も少なくはない。講師同士の懇談会は、時間が限られ何回も集うのは無理であるため、昨年は訪問学級のイベント毎に終了後に講師懇談ランチ会2回、夜の部1回を設定した。講師同士初めて顔を合わせた場でもあり、授業の悩みや訪問学級のこと、話は尽きなかった。今後も人材育成の土台として話ができる場をとりたいと考えている。

高齢化の進む現在の講師、または今後に期待する若い(学生)講師にしても、誰もが不安のない訪問授業、外出ができるようにしていくことが大切だ。長い歴史のある訪問学級の経過の中、人が変わり人数も増え大所帯になってきて、理解にズレも起こしやすくなっていた。こんな時、こんな場合どうする?と困らないように、新しい講師や学級生のご家庭に向けて、2023年4月「訪問の手引き」を不十分ながらもようやく発行できた。もちろんベテラン保護者・講師にとっても手元に置いて確認することで共通の理解を図っていかなければならない。また、さらに年毎に見直し必要なことを追加していかなければならない。

最後に、2024年度から中央公民館と共催となった「ハートフル・サポーターになりませんか?」の講座で得られたことを大切に、更に地域関係諸機関・大学・専門学校等との連携をめざしながら、重度障害者の生涯学習の活動に、「やってみようか?」と若い人が継続的なサポーターになっていきやすいような環境を整えていくことが、今後に求められている。そのためには、訪問学級の活動が広く知られて理解されることが大切で、活動内容の展示や皆さんに見てもらえるような公開イベントなどでのPRが実施できるようにしたい。また他の障害者事業・団体との連携も視野に入れ、無理なく楽しい場を継続することが重要であろう。

2) NPO 法人ひまわり Project Team

①はじめに

受講生の保護者からの『子どもと同じ年代の学生と交流を持たせたい』と言う要望を受け、2014年から訪問型の学習にボランティア学生を同行する取り組みを開始、2022年からは集合型の学習でもボランティア学生を受け入れるようにしてきた。

その中で、以前より参加していた東京科学大学の学生が学内で、重症心身障害児者との交流を目的とするサークル活動を本格化させ、学校公認の団体に発展させた経緯を紹介したい。

②学生団体aileについて:生涯学習に対する学生ボランティアの視点

団体紹介の資料(以下資料参照)から、学生の重度医療的ケア者に対する生涯学習の必要性の理解度が見て取れる。

○集合型学習：ボランティア学生の様子

ハンドサッカーの練習



練習試合



新宿養護学校在校生との合同練習



音楽療法



③ボランティア学生の受け入れ方法：登録書から見えてくるもの

学生が活動に参加する際には、所定の書式でボランティア登録書を提出してもらっている。

その中の二つの項目の回答を紹介したい。

○申込動機

- ・重度心身障害がある方との交流を通して、正しく理解したいと考えたからです。さらに、歯科医師になる自身にとってもこの機会を活かしたいと考えたからです。
- ・医療的ケア児の当事者たちと実際に関わってみたいと思ったから。また、活動の代表と話しているうちに代表がどんなことをしたいと思っているのか、実際に見ることでもっと理解したいと思ったから。
- ・小学生の頃に知的障がいを持った友人がいたことがきっかけで、元々障がいを持った方との交流をしたり、理解を深めたりする機会があったらいいなと思っていまし

西暦 年 月 日 記入



ひまわり HomeCollege ボランティア登録書

フリガナ お名前・性別	男・女
住 所	〒
Tel	
メールアドレス	
所属・専攻 学年	
資 格	
特技・趣味	
申込動機	
参加した経験が どう活かれますか？	
自己PR	

NPO 法人ひまわり Project Team

た。今回、友人の紹介で活動代表の取り組みを知り、まさに自分が長年望んでいた活動だと感じたため、参加を希望いたしました。

- ・幼いころから、看護師を目指していて、その中で中学校の頃から障がい者について興味を持つようになりました。また、高校では医療的ケア児が過ごしている療育園に訪れて看護体験を行い、より障がいの人々の看護について追及したいなと思いました。このボランティアは普段得られない障がい者の人々とふれあえる貴重な機会だと思い、申し込みました。
- ・私は今まで、重度の障害を持つ方とかかわった経験がありません。しかし、将来は看護師または保健師として様々な患者さん、住民の方と関わっていきたくてかかっているため、今のうちからこう言った活動に積極的に参加し自分の視野を広げていきたいと考えたため志望しました。
- ・同年代の障がい者の方々と触れ合う経験を得るため。
- ・社会とボランティア、障がい者のこれからあるべき関係を考える材料にするため。
- ・将来的に小児看護師を目指そうと考えているのだが、障害のある方と関わったことがあまりなく、これを機に交流してみたいと思った。
- ・将来、歯科医師になったときに、様々な方と接することがあると思うので、大学生のうちにいろんな方と接してみたかったからです
- ・交流を通して自分の視野を広げたいと思ったからです。
- ・障がい者支援のボランティア活動に元々興味があったため。
- ・以前から小児看護、医療的ケア児の看護に興味があったためです。実際にボランティアとして参加することで、大学内で講義を聞いているだけでは得られない学びがあると考えています。
- ・小学生の頃、障害児のボランティア活動に参加したことがきっかけで看護学を志しました。将来、医療的ケア児をサポートする仕事がしたいと考えています。大学生の時から子ども達に関わりたいと思い参加を希望しました。

○参加した経験をどう活かしますか？

- ・将来歯科医師として働く中で、多様なバックグラウンドを持つ患者さんと接すると思う。その時に気をつけるべきことや医師としてできることを見つけ、考えるきっかけとし、理想的な歯科医師像や病院像の形成に役立てたい。
- ・ボランティア活動を通して、人として、そして医療従事者として出会った方々に対して思いやりを持って向き合うマインドを磨いていきたいです。
- ・特に医療従事者として、患者さんの患部だけではなく心やその方が所属する社会を含めて一人の人として考える、全人的な医療に興味があるため、今後医療人としてどのように患者さんと接することが出来るのか、を模索していきたいです。また、これから社会貢献活動として私に出来ることは何なのかを見つめ直すきっかけにしたいと考えています。
- ・この機会と同じ時を過ごすことを通じ、重度心身障がいのある方との接し方を学び、身に付けたいと考えています。そして、そこで培ったものを重度心身障がいのある方との歯科の診療で活かしていきたいと考えています。さらに、重度心身障がいがある方を知ることによって、自分の中の思い込みや偏見を

なくし、それを人に伝えられるようになりたいです。

- ・今後小児の現場に進むかはわからないので、直接的に活かせるかは明言できないが、ひまわりでのボランティア活動を通して、医療的ケア児の子の実際の様子を知っているだけで、自分の視野を広げられると思う。
- ・私は大学でSDGsを推進する団体の委員長をしているのですが、SDGsの目標である「誰一人取り残さない」世の中を実現するためには、まずは多様な人への理解を深めることが重要だと考えています。本ボランティア経験を通して、障がいを持った方と友人のように一緒に時間を過ごすことにより、「自分とは境遇の違う誰か」ではなく、「自分と同じ環境で生活している隣人」のような感覚をもつことができたら嬉しいです。そして、その経験を委員会のメンバーや身の回りの人と共有し、活動に還元することによって、よりゴールの達成を身近なものにしていきたいです。
- ・一個人として、社会の中で心配りができるようになりたいです。
- ・今回得られた経験を実際に看護の現場で生かしたり、実践だけでなく学問に落とし込んで研究や新しいアクションなどにも活かしたりしていきたいです。また周りの医量従事者を目指す友人と得られた知見を共有してさらに考えを深めていきたいです。
- ・私が、重度の障害を持つ方とかかわった経験がないように、社会にはそういった人が多くいると考えています。また、障害を抱える方の中には健常者と同じことをすることは難しい方も多くいます。そういった方が、どうすれば社会から切り離されず暮らしていけるのか、健常者の中で個々の力を発揮させていけるのかを考え、この活動のような交流する場があるということを少しずつでも広めていきたいと思います。そして、将来医療従事者として働き、患者さんと交流していく中で、ここで得た経験を活かし、患者さんがどんなことを求めているのかを瞬時に察して行動できるようにしていきたいです。
- ・人の多様性への理解を深め、社会のあり方について考えるための一助にしたいです。また、この経験を周囲の人に伝えていきたいです。
- ・今まで関わる事がなかった方々と一緒に過ごし、活動することで広い視野を持つことができるようになりたいです。
- ・今後社会人になるにあたり、人との関わりや視野を広げ、多様な視点や生き方について身に着けるきっかけにしたいと考えています。
- ・親戚に自閉症の子がいるため、その子に対しての対応や向き合い方を改めて考える機会とするとともに、社会人になるに向けてより多様な視点を持ち寛容な生き方ができるように活かしていければと考えています。
- ・今後研究で障がいを持つ方とかかわるので、そこでのかかわり方に活かしたいです。
- ・将来医療の現場で働くときには、様々な事情を持った人が訪れてくると思うのでその際に活かせるようにしたい。
- ・今回参加することで、今後の自分の看護観やキャリアなどを見つめ直し、将来の進路選択に役立てていきたいと思います。
- ・将来的に看護師として働く際、それぞれの患者さんに適応し、柔軟に行動する対応力として、ボランティ

ア経験を生かしていきたい。ひまわりのボランティアへの参加によって、障がいのある方々への理解を深め、重度の心身に障がいのある方々が得意、苦手とすることや注意しなければならないこと、接し方など、実際に関わってみないと得られないことを身に着けたいと考える。

- ・障害者の方の歯の治療や口腔ケアのサポートをどのようにすれば効果的にできるかに、参加した経験を活かしたいと思います。
- ・将来医師として働く際に、患者さんと良好な関係を築き、サポートしていくことに生かしたい。
- ・私の将来の夢は学校教員です。現在、インクルーシブ教育が注目されていますが、障害の有無によらない学校教育について考え、この経験を生かしていきたいと思います。
- ・将来、小児病棟に配属された際にはこのボランティアに参加した経験を生かして、患者である子どもたちにとって安全安楽なケアを行いたいと考えています。
- ・子供たちがどのような様子で過ごすのか知りたいです。子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごしたいと思っています。その中で、コミュニケーションや子どもとの関わりについて学んでいきたいと思っています。
- ・様々な個性を持つ子供たちと触れ合うことで、多様性を身につけ将来に活かしたい。

上記の通り、参加する動機には、軽い気持ちからのものもあれば、将来をしっかりと見据えているものまで幅があるが、いずれも積極的に関わりを持ち、将来に生かしていきたいと考えている。

今後は人材育成と言う位置づけだけでなく、ひまわり HomeCollege の受講生の世界観を広げ、社会性を育てると言う重要な役割もあることから、aileとの連携を一層深めていきたいと考えている。

④課題と今後

事業開始当初からボランティア学生の受け入れを積極的に行ってきたことから、学生に対する教育的効果やキャリア形成の効果はある程度確認できていると感じる一方で、講師の人材育成には着手できていないため、次年度以降は講師の人材育成についても検討していきたいと考えている。

学生団体aile



団体概要

目的

大学生と重度心身障がいのある同世代が交流をする機会を作る。また、子どもから成人に至るまでの重度心身障がいのある方々と関わり、重度心身障がいについての理解を深める。

立ち上げの経緯

大学1年生の頃に知人の紹介でひまわりHomeCollegeに参加するようになりました。ひまわりHomeCollegeは18歳以上の重症心身障がい者のための生涯学習支援事業で高校を卒業した後も学ぶ機会を持ち続けることを目的とし、同世代で集まり、皆でスポーツや音楽を通して学習をしています。同世代が少し年上のメンバーが私を迎えてくれました。ひまわりのメンバーはそれぞれが障害を抱えています。私はボランティアとして手伝うはずでしたが、実際は一緒に活動を楽しむ友人になっていきました。この活動を他の大学生にも知ってほしいと思うようになりました。活動の中で重度心身障がいがあると、高校卒業後、同世代との関わりが非常に少ないということを知り、彼らと私たち大学生と一緒に過ごす時間を作りたいと思うようになりました。同世代同士がつながり友情を育んだり、互いの理解を深められるコミュニティを作りたいと思い、学生団体aileを立ち上げました。

現在の活動形態

- ・2024年4月に立ち上げた東京科学大学大学公認のインカレサークル
- ・東京科学大学の生徒を中心に学生14名所属（東京科学大学 歯学科：2名 保健衛生学科8名 工学部：2名 お茶の水女子大学：1名 武蔵野美術大学1名）
- ・文京区社会福祉協議会フミコムの登録団体（▶<https://www.d-fumi.com/member/detail/469>）

活動の取り組み

①大学生と重度心身障がいのある同世代の交流づくり

- ・新宿区を中心に活動するNPO法人ひまわりProject Teamの活動「ひまわりHome College」の活動に毎回5名程度の学生で参加

活動の振り返り

徐々に打ち解けてくれていることが実感できて、楽しい経験ができました。（東京科学大学歯学科）

私自身と障害を持った方との違いをどのように捉えるかを考え直すきっかけになりましたし、その違いは共に交流をする上での障壁とはならないと実感しました。実際楽しいという感情を持って今回の活動に参加することができ、来てよかったなと思えました。（中央大学理工学部）

ふれあいを通して、障がいのある方との関わり方や自分ができることについての考えが深まりました。（東京科学大学 工学院）

同年代のcollege生と一緒に楽しく活動 できました。私は大学で教職課程を履修しています。インクルーシブ教育の導入が進んでいますが、この活動を通して自分の視野を広げることができました。（お茶の水女子大学 理学部）

②大学生が重度心身障がいについて知る活動

・就労支援や生活介護サービスの見学

社会福祉法人南風会「シャロームみなみ風」を見学しました。シャローム南風では、新宿区弁天町にあり生活介護サービス、施設入所支援サービス、ショートステイ、就労支援、相談サービスなどが展開されています。館内の設備や生活介護・就労支援などの利用者の方の様子を見学させていただいたり、職員の方や利用者の方とお話させていただきました。また、就労支援を目的に施設に併設されているカフェで利用者の方が働いている様子も見学させていただきました。

・勉強会や定例会の開催

月に1回に定例会で活動について話し合うほかに手話の勉強などを実施しています。そのほかに、文京区の施設を借りて、小児訪問診療に携わっている看護師の方からお話をさせていただきました。今後も重度心身障がい児・者に関わる様々な立場の方と重度心身障がい児・者に関わる様々な職種の方から実際にお話を伺ったり、保護者や当事者の方からお話を伺う機会を作りたいと思っています。

③医療的ケアを日常的に必要とするお子さんに関わる活動

・NPO法人ひまわりProject Teamの活動「ひまわりHAUS」の活動への参加

ひまわりHAUSは新宿区在住の肢体不自由児のための放課後活動です。長期休みなどの大学の平日大学の授業がない時にaileの学生もボランティアとして参加させていただいています。

これから実現していきたいこと

aileは2025年1月に大学の公認サークルとなりました。aileが主体となって企画をする活動を増やしていきたいと思っています。

・キャンパスで重度心身障がいのある同世代との交流会の開催

・大学キャンパスの講義室等を利用して大学生と重度心身障がいのある同世代の交流会を開催する。

「障がいが重度になると、就労支援の受け入れも多くはない。生活介護施設では18歳も60歳も同じグループになる。高校を卒業後すぐに老人ホームに行くような感覚。同世代の子と違い20歳らしい生活を送ることができない。」という保護者の方の言葉が強く印象に残っています。一昨年、ひまわりHomeCollegeのあるメンバーと他大学の学祭に行きました。彼女にとって、大学に行くことは初めての機会で学生に囲まれた彼女の嬉しそうな表情が心に残っています。現在は保護者の方が運営する生涯学習をする場にaileの学生も参加させていただき、一緒に学んだり交流する時間を作っています。こうした同世代の集まりに大学生が当たり前のように参加する環境を作りたいと考えており、aileとして大学生と重度心身障がいのある同世代が集まり、一緒に学んだり、交流する企画をしていきたいと思っています。大学生にとっては身近な大学の施設での交流は、参加がしやすくより多くの学生に関心を持ってもらいやすいと思います。また、愛媛大学では研究事業として大学のキャンパスや人材を活用して重度心身障がい者への生涯学習を支援していることを知り、こうした取り組みが都内の大学にも広まってほしいと思っています。休日のキャンパスを利用して大学で大学生と重度心身障がいのある同世代が交流をしていく場を定期的に作っていきたいと考えており、施設利用について現在大学側に交渉しています。

・学祭での生涯学習の成果発表

・私たちが参加しているひまわりHomeCollegeでは、音楽やハンドサッカー、訪問学習で様々な学びのカリキュラムが組まれています。東京科学大学の学祭の場を利用して、訪問カレッジ生の1年間の学びの成果を発表する機会を作りたいと考えています。

aileの未来について

団体HP：<https://aile-15.jimdofree.com>

団体SNS：https://www.instagram.com/aile_1820/?igsh=MXRkN2t0cjdsY2J2cQ%3D%3D

3) NPO 法人フージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

今年度の人材育成に係る取り組みとして、①動画「ボランティア 初めての訪問」の制作、②学習支援ボランティア講座 について報告する。

①動画「ボランティア 初めての訪問」の制作

昨年度、ボランティアとして同行訪問した大学生にアンケートを取ったところ、訪問前には、「重度の障害のある方とか関わった経験がないので、コミュニケーションが取れるのか不安。」、「授業がどのように進み、どうサポートすればよいのかわからない。」、「紹介してくれた大学の先生からは、訪問カレッジのことを聞いていたが、イメージすることが難しかった。」等、カレッジ生との関りや、活動内容がわからないという不安を感じていたことがわかった。これらの課題の解決策として、大学生から「活動の様子動画配信」や「SNS を使った情報発信」という案が出された。

そこで、今年度は、安心してボランティアに参加するための動画制作に取り組んだ。

<制作のねらい>

訪問カレッジに初めてボランティアとして同行訪問する大学生が安心して参加するため、(a)訪問カレッジの活動の様子の一例を紹介、(b)ボランティアとして参加するための手順、(c)同行訪問でのボランティア活動の内容について、実際に参加したボランティアの様子や感想を分かりやすく伝え、参加への不安軽減につなげる。

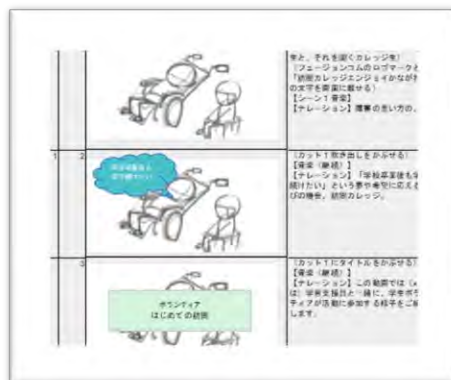
<制作過程>

当団体の学習支援アドバイザーである田園調布学園大学の新井教授に協力を依頼した。

田園調布学園大学には、新井ゼミの大学生を中心としたサークル「Bonds」があり、エンジョイかながわのサポートボランティアとして4年目を迎える。

今回、協力いただいたカレッジ生のお宅には、このサークルの大学生が毎年訪問している。保護者は、日ごろより、大学生の学びにもなるようにと、カレッジ生の障害の事や日常生活について話をしてくださる方で、今回の動画制作の協力依頼にも快く承諾して下さった。

撮影・編集は、新井教授の紹介でプロの方に依頼した。事務局でシナリオ、絵コンテを作成し、カメラマンと打ち合わせを行った。また、カメラマンの方が、事前に訪問カレッジに同行したことで、撮影のイメージを作ることができ、カレッジ生や保護者とも打ち合わせができた。撮影当日は、リラックスした雰囲気の中、通常の授業を自然な形で行うことができた。



<動画の活用場面>

当初想定していた「学習支援ボランティア講座」での活用以外に、次のような場で視聴してもらった。

○大学の授業（アンケート調査）＊田園調布学園大学、明治学院大学、鎌倉女子大学、國學院大學、フェリス女学院大学 計5校

○学びの実り文化祭 休憩時間（オンライン含む）

○特別支援学校進路担当者連絡会

○視察訪問者への説明

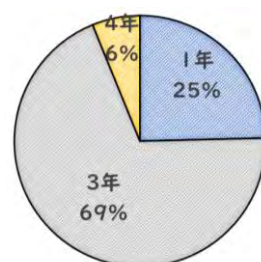
○県との協働事業の対象施設担当者

○学習支援員希望者向け説明

大学生視聴アンケート結果（大学全体）＜回答数＞65

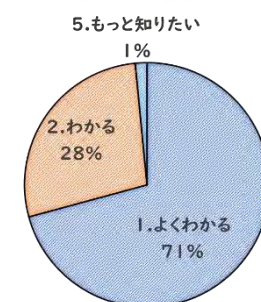
<学年>

1 年	2 年	3 年	4 年
16	0	45	4



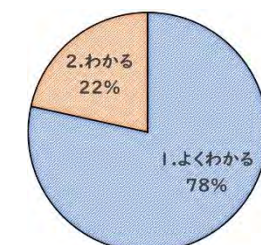
①訪問カレッジに大学生が同行する手順などがわかりましたか？

1.よくわかる	2.わかる	3.あまりわからない	4.わからない	5.もっと知りたい
46	18	0	0	1



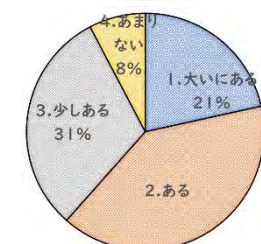
②訪問カレッジの様子が伝わりましたか？

1.よくわかる	2.わかる	3.あまりわからない	4.わからない	5.もっと知りたい
51	14	0	0	0



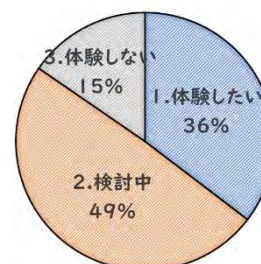
③障害の重い方の訪問カレッジに関心がありますか？

1.大いにある	2.ある	3.少しある	4.あまりない
14	26	20	5



④機会があれば、実施に訪問カレッジに同行したいですか？

1.体験したい	2.検討中	3.体験しない
23	32	10



《感想・自由記述》 ＊一部抜粋

- ・訪問の様子がよくわかった。カレッジ生の学びたいという思いが目線で読むことができた。支援スタッフの方もいるので、初めてでも安心して訪問することができそうだ。
- ・具体的な訪問カレッジの手順が分かり、訪問カレッジに関心がわいた。
- ・訪問によって学びたいと思っている障がいのある方の希望を尊重した学びの機会を多く提供している様子が非常に充実感あるように感じました。そのサポートができることが魅力的でした。
- ・カレッジ生の方と、ボランティアや大学生の方とのかかわり方を見て、障害の程度が重くなかなか外出ができない方も、さまざまな人と出会うことで表情の変化があり、ボランティアや大学生の方にとっても新しい出会いや経験を実感することができそうだったので貴重な経験になると思った。
- ・今までは特別支援学校を卒業したら学ぶ機会はあまりないのではないかと、就労が難しい人はどのように過ごしているのだろうか、と考えていたけれど、今回の映像を見て、実際にお宅を訪問して学びを提供できる取り組みがあることにとても驚いた。生涯学習についてもっと考えていきたいと思った。
- ・やってみようと思っても、手続きの流れが分からないと一歩踏み出せない人が多いと思うので、このような動画は助かります。
- ・保護者の方の様子を話していたため、安心できると思いました。実際の活動の様子が分かり、障害のある方の表情の変化も動画からわかるようになっていて、両者が楽しい時間なのだと思います。
- ・学習支援員さんが同行してくださる点はものすごく安心できるのかな、と思った。

②学習支援ボランティア講座

今年度は、2回の講座を実施した。

＜開催目的＞ 訪問型生涯学習支援事業に関わる応援者・協力者を増やす。

＜対象者＞ 大学生、退職教員、ボランティアに興味のある一般県民・市民

＜開催日と参加者数＞

第1回 2024年9月14日(土) 13:00～15:00

神奈川県社会福祉センター401

参加者:8名

第2回 2025年1月24日(金) 18:00～19:30

横浜市役所1階 横浜市市民協働推進センター

参加者:8名

＜講座の内容＞

①障害のある方の生涯学習について 成田学長

＊第2回は、「ボランティア 初めての訪問」視聴

②障害の重度の方の生涯学習の実際 片山学習支援員

③誰でもボランティア 奥野学習支援員

④ボランティア体験 田園調布学園大学 ボランティアサークル Bonds

⑤おしゃべりタイム

⑥まとめ 学習支援アドバイザー 田園調布学園大学 新井教授



〔第1回の様子〕



〔第2回の様子〕

＜アンケート結果＞

	第 1 回	第2回
所属(人数)	大学生(2) その他(6)	大学生(7)
講座の評価	とても良かった(8)	とても良かった(6) 良かった(1)
今後カレッジへの参加希望	一度参加してみたい(3) 参加を検討したい(2) 今は難しい(1) 未記入(1)	一度参加してみたい(4) 参加を検討したい(2) その他(1) *参加経験あり

＜感想・自由記述＞

○第1回

- ・講座を受ける前と後で訪問カレッジのイメージが大きく変わり勉強になりました。好きなことを繋げて共に学ぶ事ができるので、カレッジ生にとっても、私たちにとても良いことだと思いました。
- ・カレッジ生の様々な体験を提供するために支援員をコーディネートする活動に感動しました。カレッジ生から学ぶ気持ちで活動に参加させていただけたら嬉しいです。
- ・学習指導要領のメリット、デメリット。不登校・引きこもりへの対応と生涯学習 Index For Inclusion に示された「カリキュラムを創造する」という考え方。公的な学校教育と生涯学習の立場責任など、いろいろ考えました。まともありませんが、明らかなことは、生涯学習の制度、システムがインクルージョンになっていないこと国連人権委員会が指摘するようにすべての人に参加が保障された制度でないことがわかりました。
- ・カレッジ生さんの好きなこと、やりたいことを深められる時間はとても重要であり魅力的だと改めて感じました。亡くなられた方もいるとお話をきき、1回1回を出会いや時間を大切に、感謝しながら、今後過ごしていきたいと思いました。

○第2回

- ・他の学生の感想を聞くことや動画でカレッジ生の活動を見ることができ、実際に行く以外にも学ぶ機会を頂くことができました。
- ・肢体不自由の方の学習支援は映像で見るとカレッジ生もボランティアもとても楽しそうな表情で興味を持ってました。
- ・卒業までにまた機会があれば、参加したいと感じた。
- ・ともに学びたいと思った。ぜひ参加したいです。

・やり方次第で可能性が広がっているんだなと思った。重度の障害だからといって抵抗感があっても、普通の子どもと変わらないなと思った。

<まとめと課題>

学習支援ボランティア講座の参加者から、学習支援員やゲストティーチャーの申出もあり、応援の輪を広げている。今後は、県内各地での開催も視野に入れたと考えている。

今年度の取組みとして、動画「ボランティア 初めての訪問」の活用により、映像の力を実感した。この動画通じて、大学生がボランティアとしてどのように関わるのが良くわかるとともに、訪問カレッジへの関心と重度障害者の生涯学習の理解にもつながった。

特別支援学校教諭の免許を取得予定の大学生にとっても重度障害者の生涯学習について、今回の動画で初めて知る機会となり、新たな学びとなったのではないかな。

大学生には、卒業がある。毎年入学してくる大学生への広報を継続していくためには、今後さらなる大学との連携が重要となる。

また、今年度は、訪問カレッジに関心がある学習ボランティア講座受講者や、訪問カレッジに理解がある連携大学の教授らの協力により大学生に視聴してもらった。

今後は、潜在的なボランティア希望者がアクセスできる方法を考える必要がある。次年度制作予定の「訪問カレッジ活動紹介(仮称)」と合わせて広く発信し、訪問カレッジに関わる人材の育成につながるよう検討したい。

(2) 学生ボランティアの派遣に関するアンケート調査報告

1) ねらい 一定程度すでに一部団体では実施されている大学生ボランティアの受け入れについて、さらに広範に可能にするため大学・専門学校にアンケート実施し、それによって情報収集し、検討することとした。

2) 研究方法

①実施方法 グーグルフォームによるネットによるアンケート

②実施対象 国立大学 特別支援教育教員免許取得可能 教員養成課程を持つ 50 校と
すでにネットワーク団体に学生を贈っている大学・専門学校 計約 60 校

③実施期間 : 2024 年 11 月 1 日 ~ 11 月 30 日

④実施対象の選定理由

ネットワークのカレッジ生(重度障害児・者)は学校時代殆どが、通学であれ訪問であれ、特別支援学校での教育を受けてきている。この特別支援学校教員の免許を取得するための教員養成課程を持つ大学の担当の先生方に対して、まずは重度障害者の生涯学習の認知度、関心度などを調査しておきたいと考えた。

大学一覧は文科省のページから知ることができたが、大学への連絡は住所、電話番号、メールアドレスなどは個別にそれぞれの大学の HP から調べるほかなく、まずは名簿(アドレス)をつくることから始めた。HP に教授や各学科のアドレスが載っている場合もあるが、大学としての問い合わせ先しか乗っていない大学も多く、調査に時間がかかった。しかし、いったん送付始めると、ほぼ 1 か月の間に、大学の先生方からの回答を得ることができたことは、幸運だった。

⑤アンケート質問項目

前半 4 問は重度障害者の高等部卒業後の進路について知っているか、卒後も学習をしたいという希望を持っていることを知っているか、重度障害者は医療的ケアが必要な人が多いことを知っているか、卒後の学習を支援している団体を知っているか、などの認知度を問い、回答理由も問うた。

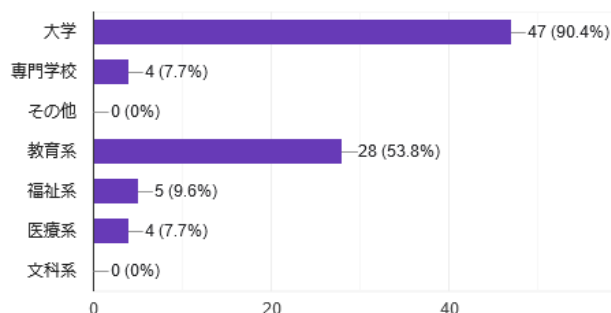
後半 5 問はネットワークの活動の交流場面に先生自身が参加することに関心があるか、学生が参加することに関心があるか、先生自身が家庭訪問して在宅の学習場面に参加することに関心があるか、学生が在宅の訪問学習に参加することに関心があるか、先生が学生を派遣することに対して関心があるか、などの関心を問うものとし、その回答理由も問うた。

3) 結果

①回答数: 55 件

回答者の所属と分野は以下の様になっている。

所属教育機関:	大学	90.4%
	専門学校他	7.7%
分野	: 教育系	53.8%
	福祉系	9.6%
	医療系	7.7%
	文科系	0%

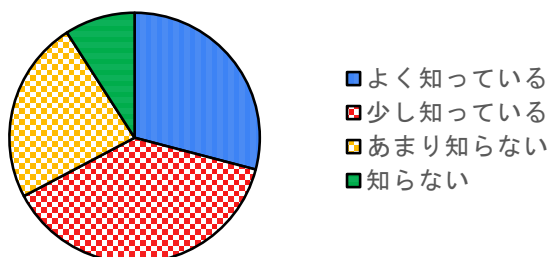


②認知度について

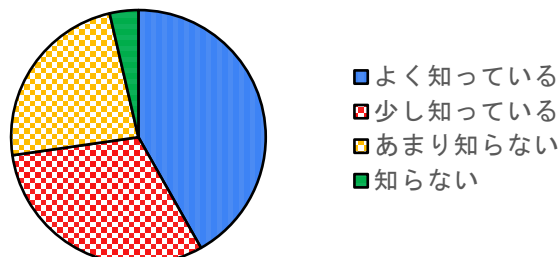
重度障害児の支援学校卒業後の進路について知っている（よく知っている＋少し知っている 以後同様）は67%とほぼ7割の人が知っている。

また、重度障害児・者が、卒後も学習を希望していることを知っているのは73%と7割であった。

1. 重度障害児が特別支援学校高等部を卒業した後の進路について

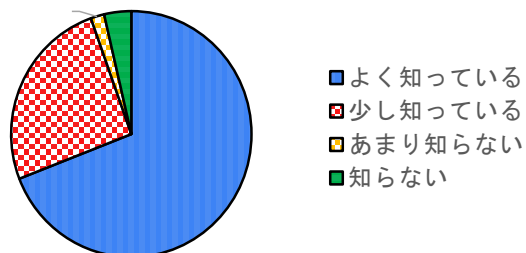


2. 重度障害児・者は卒業後も学習を希望していること

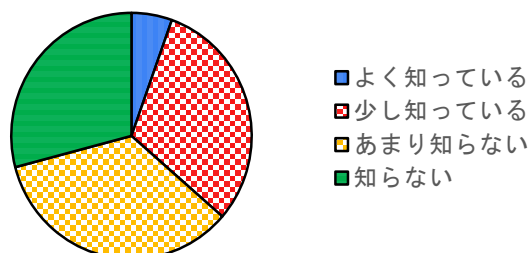


重度障害児・者が医療的ケアを必要とする人が多いことを知っている人は94%と9割5分。しかし重度障害児・者の生涯学習を行っている団体のことを知っている人は36%で、4割に満たない。

3. 重度障害児・者は医療的ケアを必要とする人が多いこと



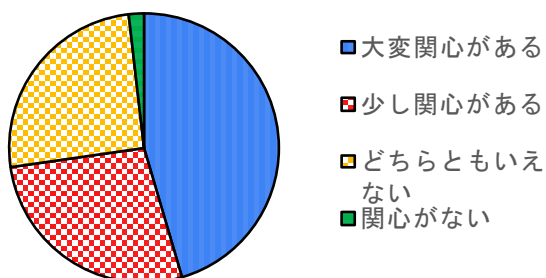
4. 重度障害児・者の生涯学習を行っている団体のこと



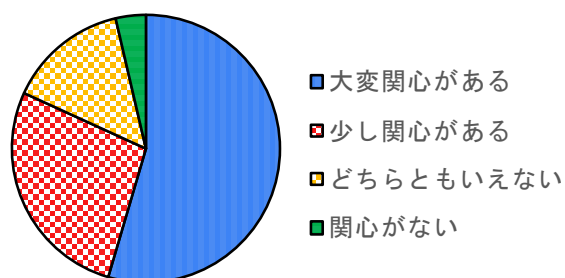
③関心について

先生ご自身が卒業後の学習場面（交流場面）への参加については、関心がある（大変関心がある＋少し関心がある）のは73%で、上記の卒後の学習を希望していることについて知っている人の割合とほぼ同じ。学生に学習場面（交流場面）への参加を紹介することに対して関心があるのは82%と増える。

5. 先生ご自身が重度障害児・者の学校卒業後の交流場面の学習に参加することについて

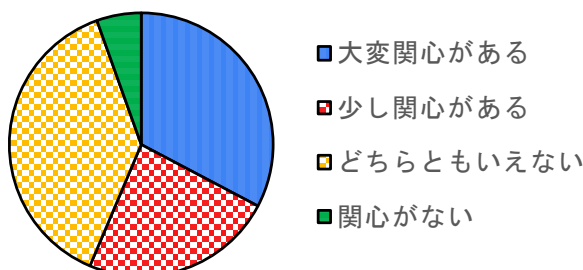


6. 先生ご自身が重度障害児・者の学校卒業後の交流場面の学習を学生に紹介、参加することについて

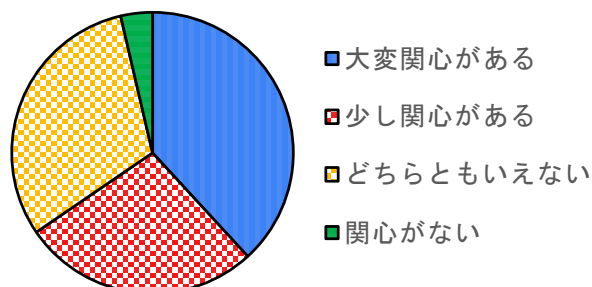


先生ご自身が家庭訪問での学習場面に参加することについて関心は57%と高くはない。一方学生が家庭訪問の学習場面に参加することに関心は65%とより高い。

7. 先生ご自身が重度障害児・者の家庭に訪問することに対して



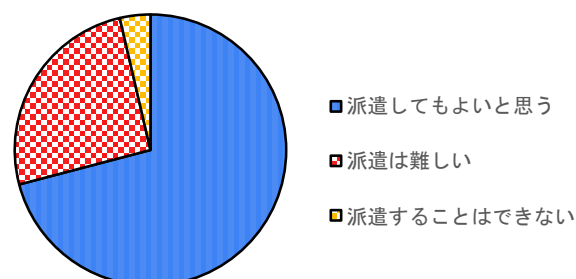
8. 学生が重度障害児・者との個人宅での学習にボランティアで参加することに



重度障害児・者の生涯学習に学生ボランティアを派遣することに対して、派遣してもよいが71%と7割の先生方が考えておられることが分かった。

さらに、今後にこのような機会を情報提供することに対して、連絡を希望する方が55件のうち21件で、返信を希望しておられ、実際の関心の高さがうかがえる。

9. 重度障害児・者の生涯学習に学生をボランティアとして派遣してもよいとお考えですか



上記の結果のそれぞれに対しての理由がのべられているので、それをまとめると、次のようになる。

*認知度について少し知っているとの回答の方の中には新聞で、情報で、文科省のデータでなどの記載がある。研究者でもある大学の先生方が熱心に情報を得ておられるからであり、昨今新聞報道などもあり、医療的ケアについての認知度は95%と高い。しかし残念ながら、卒後の学習の団体の紹介などの情報はまだマスコミでもなかなか取り上げられず、認知度が低い。今回アンケートの依頼文面にネットワークの団体紹介冊子のURL、又紹介動画のURLも載せたので、見てからアンケートの回答をした方もあったようで、アンケート自体が情報提供にもなっていたと考えることができるが、情報の絶対量の不足が大きい。

*生涯学習の場面への参加について、先生方ご自身は関心があるとの回答は多いものの、実際には勤務時間の問題からとても難しいという答えが多い。それに対して、学生に参加させたいとの回答は多く、その理由として、実際に重度障害児・者の学習場面を見ておくことは将来の特別支援学校教員としての仕事に役立つし、必要であるので、という理由が大変多い。机上の勉強だけでは学べない実際の生活の体験学習は貴重な時間になるとの意見が多かった。

*専門学校では施設や病院での実習が組み込まれているし、特別支援教育教員免許のための教育実習も課程にあるが、家庭訪問という形での訪問授業の実習は極めて少ない。ベテランの訪問教育支援員との同行での学生のボランティアの学びは、想像以上の貴重な実習経験となるのではないかと推測される。

4) 考察及び今後に向けて

これだけ学生に参加させてもよいとの先生方の回答が多いことは大変うれしく、今後に向けて明るい希望が見えてくる。しかしそのためには、派遣は難しいとお考えの先生方の危惧されている点を拾い出しそこを解決してこそ、実現していけると思われる。

まず一番大きな心配は学生が予備知識なしに参加することで、そのリスクを挙げておられる先生が多い。重度障害児・者の生活や医療的ケアの実際に対して、ある程度の基礎知識を持って臨ませたいとの意見が多いのもうなずける。重度障害児・者に初めて会う人は、どのように接したらよいかわからないとの感想を持つ人が多いのは事実であり、できれば予備知識を準備できると学生自身が安心して参加できることは確かだろう。そのために、大学のカリキュラムやコースの内容変更まで想定して、それは難しいという先生もおられるが、そのような大きな変化ではなく、動画の視聴程度でも良いのではないかとと思われるので、この点については今後の検討課題だ。

そのためのボランティア保険への加入が無ければ、学生を派遣することはできないとの意見も複数ある。これは当然のことで、すでに実施団体はすべての学習支援員は加入しているし、ボランティアもその都度保険加入していることが多い。

また、昨今の学生は時間的にも経済的にも忙しい事情があるようで、できればボランティアとはいえ、交通費位の費用が出ると、学生が行きやすくなるのではないかとの意見もいくつかあった。今回は国立大学でのアンケートで、学生は国立大学生が多いが、もし公立や私立などの大学であれば、なお一層経済的な援助の必要性も変化するのかもしれない。

今回のアンケート結果を見ると、全体としては予想以上に教員養成課程の先生方は、重度障害児・者の生涯学習に対して関心が高く(78%)、学生をボランティアで参加させることに対しても積極的なご意見(70%)が多かった。

そこで、問題になるのは、そのような生涯学習の団体や団体の活動を知っているという回答が4割に満たない(36.4%)現状である。これは、重度障害者生涯学習ネットワークでも、ここ何年か特殊教育学会での発表を続けており、また、全国訪問教育研究会でも取り上げられていることなどを考え併せても、まだまだ実施団体が全国的に少なく、また情報が行き届いていないことなどがあり、周知徹底が必要であることがわかる。

重度障害児・者という言葉でアンケート実施したが、その回答の中に「重度障害者の定義があいまいなので、回答が難しい」との指摘もあった。そこで、文部科学省が令和4年度に公開した、令和3年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」重度重複障害児者等の生涯学習に関する実態調査において対象とされた重度重複障害児者、の定義を見ると、

「学校卒業後の以下の障害児者を対象とした。

- ・ 重症心身障害児者(大島分類にて1～4に該当すると考えられる児者)
- ・ 重度肢体不自由児者(身体障害者手帳 1 級、2 級およびそれらに該当する児者)
- ・ 医療的ケア児者(医療的ケアスコア記載の医療的ケア及び見守りが必要な児者)」

となっていて、当ネットワーク団体が対象としているカレッジ生を表わしていると考えられるので参考として挙げておく。

このアンケート結果を見て、当ネットワーク所属の団体はどのような感想を持ったかについて、アンケートを実施したところ、つぎのような感想があがった。

- ・アンケート結果と同様に、ご相談した大学関係の教授等（主に教員養成）は、事業への関心も高く、講義の中で事業紹介やボランティアの紹介等の協力・支援を積極的に頂いている。学生の同行訪問事業への関心も少なくないと感じている。実施の形態はボランティア。大学側も事務局側も望んでいる形態で、学生はボランティア保険に加入している。同行訪問は年間 15～20 回実施し、交通費として一律 2,000 円を支払っている。実施に当たっては、参加したい学生と、学習支援員・カレッジ生の日程調整が難しい。学生自身も教育実習やそれに係る様々なボランティア等を行い空き時間が少なく、実施者側が前月末に日程を調整している事も調整を難航させる要因である。協力大学を増やすことは簡単だが、同行訪問には手順が必要なため、多くの大学と連携する際は、行事参加が有効だと考える。同行訪問を受け入れるには、実施者側のマンパワー体制も整備する必要があり、カレッジ生にも、事前に同行訪問の希望の有無を調査している。また、昨年度の同行訪問の事後アンケートでは、有意義であると高評価の反面、参加前の不安が大きいことも分かったので、今年度初めてボランティアに参加する方の不安を少しでも取り除きたいと 10 分程度の動画を作成し、協力大学や学習支援員ボランティア講座で視聴頂き、好評である。同行訪問は、障害の重い方やその家族の生活の様子などに直に触れる貴重な機会になっている。大学生（大学）にも、カレッジ生とご家族両者にとって貴重な機会（体験）だと考える。百聞は一見にしかずだと、同行訪問の度に感じている。
- ・予想以上に関心を持たれていて、学生の派遣に関しても前向きな回答が多かったのは良かったと思います。今後の課題は、生涯学習を提供している団体を広く周知することと、活動団体自体を増やしていく工夫が必要だと思いました。
- ・大学の組織としての受け入れは、いろいろな縛りの中難しいけど、必要性は理解するし、個人レベルで話をすることは可能とお聞きました。まずは、知ってくださる方がこのようなアンケートなどを通じて広げることが第一歩。ありがとうございます。小さくとも前に前にも。
- ・学生を派遣しても良いと考えている先生方が多く驚きました。本学の学生ボランティアは、現在本学教育学部の学生のみであるが、募集に関しては所属大学に縛られない形をとっています。近隣にリハビリ専門職の養成課程を持つ学校等もあるため、学校間で連携をとることによって、学生がより参加しやすい環境を構築していくことができるのではないかと思います。学生ボランティアの参加に関しては、学生さんをフォローできる体制を事務局が持っていないと難しい場合もあるため、そういった面を考えても、学内のボランティアサークルなどと協力していくことは非常に重要になるのではないのでしょうか。
- ・情報が無いために、重度障害者が卒業後も学習を希望していることを知らなかったという大学の先生方も一定いらっしゃるので、様々な方法で（アンケート自体も情報提供の役に立っている）知っていただくことが大事だと思いました。そのために、学生ボランティアの紹介をお願いできるような私どもの活動や訪問学級の実情を紹介するチラシやブックレット等を作成していきたいものと思います。

- ・利用者の皆さんも若い学生さんとやりとりできるのは貴重な機会だと思います。また、学生さんにも特別支援教育の魅力が伝わればと思います。現在は、ST,OT,ORT や現職の教員の方の見学者が多いですが、本団体でも学生さんの希望があれば、いつでも受け入れようと準備しております。
- ・多くの大学の先生方は学生派遣してもよいとしているが、身近に生涯学習を必要としている団体を知らない場合が圧倒的に多いことがわかりました。まずは、知っていただく事が大事と考え、アンケート結果とお礼の文書に添えて、2024 年度版の「訪問型生涯学習支援」理解推進パンフレットを送付したらよいかと思います。その際、基本的には大学から見て一番身近な団体から大学の先生へ送付します。そして、一歩進めて、学生とどのような具体的な関係を持つことができるか？話し合えるところまで持っていければと思います。
- ・教員養成課程において、学校現場と同様にこうした民間の活動への学生さんかの可能性がよくわかる内容かと思います。ぜひ、文部科学省の高等教育担当者にも知ってもらえると良いので、文科省提出報告書にうまくまとめて下さい。また学会等への発表も是非お願いします。
- ・今後の周知のためには重要なものかと思います。大学へのアプローチも戦略的な考えが必要と感じております。
- ・教育系や福祉系の大学や専門学校に障害の重い方の生涯学習の意義は、表面的には知られるようになってきたと思われます。ただ、深くかかわるには、今まで以上にいろいろなきっかけや機会があったほうがいいことが考えられました。そして、活動を行っている私たちからの働きかけももっと積極的にしたほうがいいことに気づかされました。

上記アンケート結果も参考として、今後の大学生ボランティアの育成、参加についての活動として次のようなことが考えられるのではないかと。

- i ネットワークのそれぞれの団体の近隣の大学の特別支援教育教員養成課程担当者に連絡して、その先生方に実施団体の自己紹介(当ネットワークも含み)をして、その存在を知っていただく。
- ii 在宅であれ交流場面であれ、大学生が参加可能な具体的な交流の場の設定を提案していく。
- iii 学生ボランティアの事前の準備としての研修に協力する。(紹介動画や冊子を持っていく等)
- iv 実際に団体のカレッジ生との共同学習を実施する。
- v 参加した大学生に実施後のアンケートなどを実施して、感想・意見をまとめる。
- vi 参加を紹介してくださった先生方に報告を挙げて、成果を確認する。その後の紹介も依頼するなどして、継続的な連携を構築することができるよう働きかける。
- vii 参加した学生から、同じ大学の他の学生にも情報共有してもらい、輪を広げていってもらえると望ましい。(ボランティアグループなどの案もよいのでは)
- viii カレッジ生からの感想や、保護者からの感想などもまとめて、この大学・専門学校との連携活動を「人材育成」の観点で継続的に取り組んでいけるとよい。

今後に向けては全国各地に生涯学習の希望者とその担い手がいても、なかなか実施団体結成への動きが困難な状況がある。新しく始まった「夢プロジェクト」の利用なども視野に入れて、小さな動きからでも進めていけると良いのではないかとネットワークとしては願っている。_____

V 理解啓発

1. これまでの研究の到達点と課題

訪問カレッジに関する研究成果の普及及び理解啓発のために、ネット会員による日本特殊教育学会自主シンポジウムと「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」の2つのイベントをこれまで企画開催してきた。

日本特殊教育学会では、平成 30 年の大会から「障害の重い人の生涯学習」と題して自主シンポジウムを開催している。そのサブテーマは、第 1 回「障害の重い人にとっての生涯学習の意義」、第 2 回「学習内容とその課題」、第 3 回「生涯学習の立ち上げから持続可能な支援の仕組みづくり」、第 4 回「当事者・保護者のニーズに基づいた生涯学習の支援」、第 5 回「学校教育から卒業後につながる主体的な学びを支えるもの」、第6回「生涯学習実現のさまざまな形」である。文部科学省からも毎回、話題提供をしていただき、制度創設に向けて今、何が求められているのかという視点を持ち続けている。私たちの立ち位置や今後の課題と進むべき道を模索するためにこのシンポジウムの中で得ることができた知見や実践の交流は大きな意味があると認識している。

「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」は、令和 2 年度から文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」の取り組みとして開始し、令和 4 年度から「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」の一部として開催してきた。この「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」については、今回からテーマ別「共生社会コンファレンス」に位置づけて開催した。

その他、これまで重症心身障害児（者）を守る会や、重症心身障害学会等の依頼を受けて、実践研究の発表や理解啓発に関する研修やイベントの企画・開催協力などを行ってきた。

2. 実施内容

(1) 全国訪問教育研究会（東京）記念シンポジウム（令和 6 年 8 月）

特別支援学校で訪問教育を担当する教員による研究団体が開催する大会において、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関するシンポジウムの企画・開催協力を行った。

(2) 日本特殊教育学会第 62 回大会（令和 6 年 9 月）自主シンポジウム企画運営

自主シンポジウムは、今年で第 7 回となる。内容としては 10 年を超えた実践を振り返り、もう一度原点に立ち返り、重度医療的ケア者の学び続ける意義を共有した。

(3) 日本発達障害学会第 59 回研究大会（令和 6 年 10 月）

実行委員会企画シンポジウムにおいて、訪問カレッジの発表を行った。

(4) インクルーシブな学び東京コンソーシアムへの参加

東京都教育委員会「インクルーシブな学び東京コンソーシアム」の会員として、開催イベントに協力する。

(5) 神奈川県社会福祉協議会による神奈川新聞への広告への協力

(6) 「共生社会コンファレンス」の実施

3. 実施記録

(1) 全国訪問教育研究会(東京)記念シンポジウム(令和6年8月)

○タイトル「『卒業しても学び続けたい!』の願いに応える未来を目指して」

○企画協力 重度障害者・生涯学習ネットワーク

○ねらい(趣旨)

障害者の生涯教育は、2014 年日本政府が批准した障害者権利条約では「生涯学習を確保する」とし、2015 年国連サミットで採択された SDGs(2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標)では、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」としている。また、文部科学省は、2017 年 4 月に「障害者学習支援推進室」を新設し、2018 年度からは「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を開始している。

病気や重い障害のある子どもの教育において、①養護学校義務制開始(1979 年)、②医療的ケア児の教育、③病院内学級等の設置、④高等部訪問教育試行(1997 年)、⑤不就学者の教育を受ける権利の復権など、訪問教育は大きな役割を果たしてきた。そして、6番目の課題が生涯学習であり、特に外出が困難な訪問生にとって、学校卒業後も継続的に学べる「訪問型生涯学習の創設」が願いである。

本シンポジウムは、訪問生の学校卒業後の学び(生涯学習)の保障の現状と課題に関する報告をもとに「訪問型生涯学習のニーズと制度創設」について考える場としたい。

<シンポジスト>

●訪問型生涯学習支援の事業者

「ぼくにも学校がやってきた」

大石恒子さん(日野市障害者問題を考える会・副代表)

●訪問型生涯学習支援で学ぶ学生・保護者

「『訪問大学おおきなき』で学んだこと」

倉本雅代子さん(訪問大学おおきなき・学生の保護者)

●特別支援学校の進路担当者

「特別支援学校高等部訪問生の進路指導」

櫻井真紀子さん(東京都立多摩桜の丘学園 肢体不自由教育部門 高等部 進路担当)

●訪問型生涯学習支援を広げる活動

「生きることは学ぶこと、学ぶことは生きる喜び」

飯野 順子さん(重度障害者・生涯学習ネットワーク・会長)

●東京都・インクルーシブな学び 東京 コンソーシアム担当者

「『インクルーシブな学び 東京 コンソーシアム』が目指す学びの共生社会」



大嶋 尚史さん(東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課)

<コーディネータ>

榎木暢子(全国訪問教育研究会会長/訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学)

(2) 日本特殊教育学会第 62 回大会(令和 6 年 9 月) 自主シンポジウム企画運営

障害の重い人の生涯学習(7)―障害の重い人が卒業後も学び続ける意義―

企画者 三科聡子(宮城教育大学教育学部)

相澤純一・石川政孝(重度障害者・生涯学習ネットワーク、NPO 法人訪問大学おおきなき)

司会者 三科聡子(宮城教育大学教育学部)

話題提供者 竹内麻子・榎木暢子・荻田知則(愛媛大学@訪問カレッジ&オープンカレッジ)

相澤純一(NPO 法人訪問大学おおきなき)

下川和洋(重度障害者・生涯学習ネットワーク、訪問カレッジ@希林館)

福澤信輔(文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室)

指定討論者 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク、NPO 法人地域ケアさぼーと研究所)

KEY WORDS: 生涯学習 組織づくり 制度化

【企画趣旨】

過去6回の本シンポジウムの企画では、障害の重い人の生涯学習の取り組みの立ち上げから今までの経緯や全国各地の取り組みの全体像を把握することに努めてきた。関東近辺では、東京都、神奈川県を中心として埼玉県でも、この4月に訪問カレッジが立ち上がった。

今回のシンポジウムでは、学校卒業後も学び続ける中での学生の具体的な様子や変容から、あらためて、「障害の重い人が卒業後も学び続

ける意義」を問い、障害の重い人の生涯学習の制度化を意識した議論を行いたいと考えた。

なお、話題提供の中で紹介される事例については、本人・保護者の承諾を受けている。

【話題提供I 愛媛大学訪問カレッジ&オープンカレッジ】

愛媛大学では、附属インクルーシブ教育センターのミッションとして持続可能な生涯学習支援の仕組みの創出を試みている。オープンカレッジや「共に学び、生きる共生社会コンファレンス中国四国ブロック(まるのつどい)」を通して、行政、社会教育関連施設、福祉事業所、民間企業と協働してきた。それぞれの立場での取組を、ライフスキル教育(生きる力の涵養)の観点から俯瞰することで、「ヒト・モノ・カネ」と「法・制度」に関して互惠・相互補完的な関係を構築し、生涯学習の場を提供し続けられる可能性が広がる。



支援機器等を用いて重度障害者の学びへのアクセシビリティを確保した現代版「Universitas」を創出することは、学びに困難を抱える多様な人々に、リベラル・アーツを提供することにつながる。大学の立場として、人的・物的・経済的資源を結ぶハブ(Hub)の役割について提言したい。

【話題提供2 NPO 法人訪問大学おおきなき】

訪問大学おおきなきは、東京の訪問カレッジ@希林館やひまわり Home College の活動を知り、地域の学生のニーズに応えるために 2014 年に任意団体として立ち上げ、2019 年に NPO 資格を取得した。初期の学生は 10 年を越えて学び続けていて、障害の重い人が学び続ける意味を体現してくれている。障害の進行から、車いすの姿勢で学んでいた学生がベッドに移ったり、学ぶ時間を短くしたりということはある。しかし、学びに向かう姿勢や意欲は衰えることはないし、新たな課題にチャレンジしたり、それまであきらめたことができたことで自己肯定感を高めたりという足跡を刻み続けている。まさに臨界期とかマンネリ化という言葉とは無縁の学ぶ喜びが学生の学びに向かう姿勢を支えているようだ。今回はその事例を発表したい。

【話題提供3 重度障害者・生涯学習ネットワーク】

訪問型生涯学習支援を行う団体による「重度障害者・生涯学習支援ネットワーク」(代表 飯野順子 参加団体数 16(2024 年 5 月 1 日現在))は、文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」を令和 4 年度に受託以来、今年 3 年目になる。これまでの 2 年間は、神奈川県において連携協議会を開催した。この間の成果は次の 2 点である。

- ①連携協議会の成果:令和 6 年度からは「ボランタリー活動推進基金による神奈川県との協働事業」として活動。
- ②障害福祉計画への反映:国が策定した障害者基本計画(第 5 次計画 令和 5 年度~令和 9 年度)に「訪問支援を含む多様な学習活動を行う学びの場やその機会を提供・充実する」が記載。

【話題提供4 文部科学省障害者学習支援推進室】

文部科学省では平成 29 年度より障害者の生涯学習支援政策に着手し、平成 30 年度から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を開始。令和 5 年度は、都道府県中心の地域コンソーシアムによる支援体制構築、市区町村と民間団体の地域連携による生涯学習機会の拡大促進、大学・専門学校等におけるモデル構築の 3 メニューを計 37 団体に委託して事業を推進。障害の重い人を対象とした委託団体の事例や、令和 4 年度に実施した「障害者の生涯学習活動に関する実態調査~地方公共団体及び障害者本人を対象とした実態調査~」の調査結果等も踏まえて話題提供する。

【指定討論】

- ①障害の重い方々の学びの意味・意義を整理する。
- ②学習プログラムの類型化を試みているが、訪問型学習 独自の包括的なプログラムを創設する必要がある。
- ③在宅で学びを必要としている方々のニーズ調査の必要性を感じているが、その手立てはあるのか。

④ネットワークの参加団体と同様な活動をしている団体と、どのようにしたらつながれるか。

(3) 日本発達障害学会第 59 回研究大会(令和 6 年 10 月)

生涯にわたり学び続けること～実践の蓄積から～

企画者・司会者 高橋 幸子(國學院大學) 柴田 保之(國學院大學)

話題提供者 松田 泰幸(町田市とびたつ会) 鈴木 啓太(社会福祉法人かたるべ会)
成田 裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会)

指定討論者 柴田 保之(國學院大學)

KEY WORDS: 生涯学習 社会教育 ニーズ

【企画趣旨】

2017 年に当時の文部科学大臣から「特別支援教育の生涯学習化に向けて」とのメッセージが発せられ、「障害者が一生涯を通じて教育や文化芸術、スポーツなど様々な機会に親しむことができるよう、福祉や労働も含めた関係施策を連動させながら支援していく」との方針の下、「障害者学習支援室」の設置、有識者会議開催、多方面の実態調査、モデル事業への助成などさまざまな具体的施策が検討された。障害当事者へのアンケートにおいて「生涯学習機会が十分にある・ある程度ある」との回答は、2022 年度には 38.2%となり 2018 年度の 34.3%から若干の増加が確認されているが、「取り組んでいない」その理由として「どのような学習があるか知らない」とした回答は 55.8%であり、依然として情報提供を含め学習機会が十分確保されていない状況は続いている。(文部科学省 2022)

一方、文科省が施策を推し進める以前から、特別支援学校(養護学校)の同窓会活動としての青年学級、大学社会貢献としてのオープンカレッジ、社会教育としての障害者青年学級は、1970 年代以降、各所で展開、継続され実践が積み重ねられてきた。それらの取組の内容は、学習者の多様なニーズを踏まえ、余暇・レクリエーション活動、文化芸術・自己表現活動、スポーツ、日常生活スキル、学校での学びの維持・再学習など多岐にわたっている。

本シンポジウムにおいては、先駆的に取り組んできた 3 つの団体により実践の蓄積から見いだされた成果と課題について当事者の声も交えながらご発表いただき、障害者が生涯にわたり学び続ける意義や機会の創出について検討することを目的とする。

【話題提供者①の要旨】

東京・町田市教育委員会には「障がい者青年学級」という公民館事業があります。親からの要望を受け、この事業を担当することになった社会教育専門職員の大石洋子さんが約 1 年の準備を経て、20 人の参加者と市民ボランティアと共に 1974 年 11 月にこの事業を始めました。今年で 50 年になります。とびたつ会は、その青年学級の人数が 200 人に近づき、これ以上参加を受けられないといった 2003 年に、ピープルファースト滋賀大会に参加した有志が、その大会で本人活動の刺激を受けて、2004 年 5 月に立ち上げた本人活動の会です。青年学級を「卒業」して、若い人に青年学級に参加してもらおう、町田でも本人活動をつくっていこうと 8 人でスタートしました。現在、第 2、第 4 日曜日の午前 10 時から 16

時まで、市内の公共施設等を使って活動しています。参加者は毎回 20 人ほどです。車いすを利用する人でヘルパーを伴って参加する人もいます。年会費は 4000 円。会場費と通信費が主な支出です。社会福祉協議会から活動助成金も受けています。

活動の特徴として青年学級との大きな違いは活動の自由度です。当初は、活動費の捻出と存在をしてもらうために、映画会やコンサートなどのイベントを企画・開催しました。その後、講師を招聘しての学習会を実施するようになりました。被爆体験を聴く。性と生について学ぶ。国会議員の話を聴く。国会議事堂の見学に行く。性同一性障害について当事者から話を聴く。ハンセン病について新聞記者から学ぶ、資料館を訪ねる。出生前診断について助産師さんから話を聴く。そして、それらの学習会やイベントから歌が出来ました。感想などをもとに歌詞をつくり、それをうたうことで、思いを共有しています。1988 年から続く「若葉とそよ風のハーモニー」コンサート等、社会に向けて活動をアピールする際にうたっています。

2024 年の今年は 20 年目の活動になります。5 月 25 日には、記念イベントを盛大に行ないました。当初から参加しているメンバーも私も 20 年歳をとったことになります。20 代の青年も加わっています。課題としては、この活動をどのように維持・発展させていくかということです。ともに活動する支援者は、元青年学級のボランティアを中心に 8 人ほどで、無給のボランティア。世代交代を含め、あまり展望が持てていないのが現状です。とはいえ本人活動の会を自称しているのですから、当事者を中心に活動を組み立てみんなで学び、気づき、思いを共有し、社会に発信していくことを目指すことに変わりはありません。自由に自分を表現できる場、月に 2 回、行ってみたくなる場をみんなでつくっていきたいと考えています。

【話題提供者②の要旨】

社会福祉法人かたるべ会は 1990 年 8 月の設立以来、「障害のある無しに関わらず、社会人として普通に暮らせる社会」の実現を目指し、横浜市を拠点に知的・精神・身体障害者の就労支援や生活支援に取り組んでいる。日中事業所やグループホームで「仕事・生活・余暇」という生活リズムを保つことを目的とした事業を展開している。

実践している支援方針はこちらになる。「利用者の苦手な部分ではなく、得意な部分に注目した活動に力を入れている。そうすることでモチベーションが高まり、コミュニケーションも円滑となり、生きがいに繋がると考えている。また、仕事については社会人の義務として障害の種別や程度を問わず、すべての利用者に『社会的労働』に参加してもらうことを方針にしている（平野理事長）」

また、障害があっても社会人として普通に暮らせる社会の実現を目指し、利用者の結婚や出産、子育てなどのサポートにも積極的に取り組んでいる。「障害のある利用者に交際相手ができる和生活する喜びにつながり仕事のモチベーションが高まる。これまで法人では 4 組の利用者が結婚している。グループホームで食事の提供や金銭管理、移動支援などを受けながら生活している人もいるし、出産して親子で住んでいる人もいる。福祉関係者であっても、さまざまな困難があることを理由に障害者同士の結婚や出産に否定的な意見もあるが、支援者など周りからどんなに大事に思われていても、大切なパートナーや子どもができるほうが利用者にとって生きる励みにつながり、人として成長していくことを実感する（平野理事長）」

かたるべ会は開所以来 33 年間、一貫して社会的労働を追求してきた。就労に力をいれ、少しでも社会の役に立つ仕事を追求してきた。そして、ある一定程度の成果を上げてきた。しかし、就労できる方たちは、ある程度力のある方たちであり、個性の強い方かたたちは、就労に結びつかない状況。そこで、かたるべ会は職域開拓に目を向け、力を入れてきた。そして、演劇、音楽、美術、YouTuber など、様々な職域を開拓してきた。また、その基本は「厳しく働く」のではなく「楽しく働く」こと。楽しく働くことで、生産性は上がり、病気にもなりにくい状態となる。私生活に関しても同様、生活をこなしていくのではなく、「楽しく生活する」ことが重要であると考え。2024 年度、かたるべ会の主要テーマは「楽しくなければかたるべ会じゃない」「楽しく働き」「楽しく生活する」。「楽しいと思えることは、とにかくやってみる」を合言葉に、楽しい職域開拓、楽しい生活の開拓を徹底的に実施していきたいと思う。

【話題提供者③の要旨】

人工呼吸器など 24 時間医療的ケアが必要な重度障害者は、通学や通所が難しく在宅生活を余儀なくされている。心豊かな生活を実現するため、卒業後も「もっと勉強したい」「みんなとつながりたい」と「学び」を希求しているが、彼らの生涯にわたり学び続けたい夢や願いに応える制度はなく孤立している。そこで 2019 年に訪問型の学びの機会「訪問カレッジ Enjoy かながわ」を始動し、学びを希望するカレッジ生を中心に学習支援員（元教員）がチームを作り訪問している。訪問型生涯学習支援（学びの出前）の活動とともに、障害のある方の生涯学習（学ぶ権利）に関する理解普及を目指し、活動の広がりや地域の社会資源を活用した多様な学びの創設を願っている。

当初 2 名だったカレッジ生は 23 名になった。「学びは十人十色」で、本人の好きなことを核に学びの内容を一緒に考えている。彼らの学ぶ姿に触発されカレッジは学習支援員の生涯学習にもなっており、話題提供では「教えるから学びあいへ」を合言葉に実践している学びの様子を紹介する。2021 年には大学生の同行訪問を開始し、2022 年からはゲストティーチャー訪問も始まった。日々の学びは LINE を使い学習支援員間で共有し、プログラムを蓄積して学びのノウハウを障害のある方の豊かな生き方支援として活用できないか検討中である。

カレッジ生の家族から「目標や楽しみがあり肯定してくれる存在があることは、本人はもちろん家族にも生活の場を広げてくれる」と言葉を頂いた。私たちの活動が肯定され背中を押された感があり「学ぶことは生きること」だと感じている。とは言え、現状の活動はボランティアである。安定した運営には運営資金と人材確保が不可欠である。制度化に向け、リーフレットの作成やネットワークの仲間と訪問カレッジの文化祭を開催するなど、広報・理解啓発活動にも努めている。まずはこの活動を知ってもらい、一緒に活動する協力者・応援者を増やすことが急務である。

【指定討論者の要旨】

今回ご報告いただく3つの団体の活動は、それぞれの当事者の間に存在する学びへのニーズ（＝願い）に寄り添うことによって生み出され、積み上げられてきた活動である。学びへのニーズというものは、それに応えようとする取り組みによって、初めて掘り起こされて明確な形を結び、そして、活動の発展とともにのみ、より深いニーズが生み出されていくものであるが、そのようなニーズが存在すること自体がまだ社

会には気づかれていないものとも言える。しかも、3つの団体の活動においては、学ぶことと生きることはそのまま強く結びつき、一体となっており、活動を通して描き出される当事者の生きる姿は、常識的な障害理解を根底から覆すものをも秘めているということもできるだろう。

とびたつ会の取り組みは、広く社会の問題を学びつつ、社会に発信する障害当事者の姿を明らかにした。かたるべ会の取り組みは、社会人として普通に暮らすということ、結婚、子育てまで視野に入れながら明らかにしてきた。そして、フュージョンコムかながわの取り組みは、24時間医療的ケアが必要な重度障害者にとって、学ぶことが生きることと直結する姿を明らかにしている。いずれも障害当事者の学ぶことや生きることに関わり添うことによっては初めて明らかになってきたものだ。

昨今の障害者の生涯学習への注目は、文科省からの提言によるところが大きいですが、そもそもそれは障害者権利条約を受けたものであり、権利条約とは、まさしくこうした現場からの当事者自身の声の尊重こそを重視するものである。そして、障害者の生涯学習に関しては、その提言を受けて空白の場所に何か打ち立てるというものではなく、はるか以前からその重要性が一部で認識され実践されつつも、国レベルでは看過されてきたものに対する再評価としての意味を持つ。その意味で、文科大臣の唱えた「特別支援教育の生涯学習化」という考えは、方向が反対である。生涯学習の現場での取り組みから見てきた新たな学びへのニーズや障害当事者の新しい生きる姿から、インクルーシブ教育を目指すと言われる特別支援教育が、何をいかに学ぶかが問われているのではなかろうか。

(4) インクルーシブな学び東京コンソーシアムへの参加

今年度、「超福祉の学校」（主催 NPO 法人ピープルデザイン研究所 共催 文部科学省、渋谷区、東京都教育委員会、株式会社 丹青社）等の活動にはイベント開催日が重なり、参加できなかった。

インクルーシブな学び東京コンソーシアム総会（令和7年1月27日（月曜日）14時00分から16時00分）に参加した。

(5) 神奈川県社会福祉協議会による神奈川新聞への広告への協力

障害者週間（12月3～9日）にあわせて、神奈川県の4つの社会福祉協議会が神奈川新聞に広告を掲載。その中で、生涯学習支援について、取り上げていただいた。

12月3日から12月9日は「障害者週間」です

学ぶことは 生きること

～生涯にわたって 学び続ける喜びを～

医療的ケアを必要とする障害の重い方多くは、在宅生活を余儀なくされています。
心豊かな生活の実現のために、「大学へ行きたい」「もっと勉強したい」「みんなとつながりたい」などの「学び」を希望しています。

社会福祉法人横浜社会福祉協議会 障害者支援センター
社会福祉法人川崎市社会福祉協議会
社会福祉法人相模原市社会福祉協議会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 かながわボランティアセンター



写真提供：NPO法人フュージョンコムかながわ

（印）神奈川県社会福祉協議会 広報課 広報電話（かながわボランティアセンター）TEL.045-312-4815

(6)「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」の実施 第3回 訪問カレッジ「学びの実り 文化祭」

～医療的ケアの必要な重度障害者の学びの成果を発表する文化祭～

I 实施概要

1. 期日 令和6年10月26日(土) 午後1時~4時

10月27日(日) 午前10時~午後3時40分

2. 場所 新百合トウェンティワンホール・地下2階(小田急線「新百合ヶ丘駅」北口徒歩2分)

3.主催 重度障害者・生涯学習ネットワーク ※文部科学省委託事業

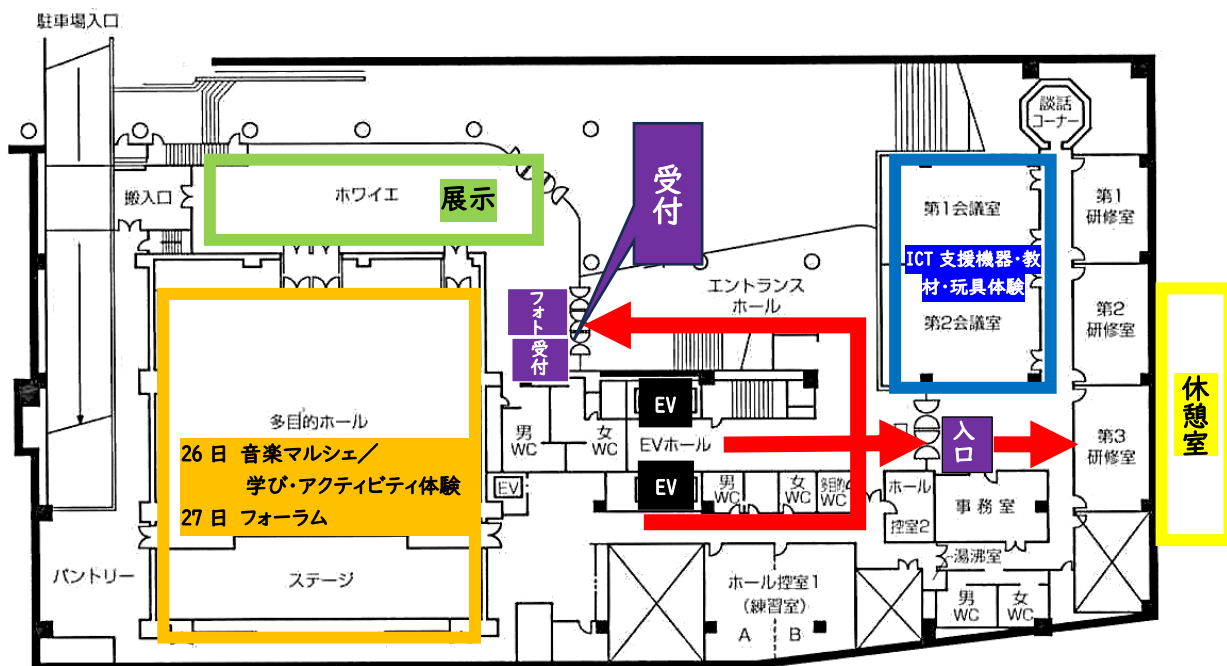
4. 後援 神奈川県、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、川崎市、川崎市教育委員会、相模原市、神奈川県社会福祉協議会

5. 日程

日付	会場	午前	午後
1日目 10月26日 (土)	ホワイエ	<準備>	重度障害者・生涯学習ネットワーク 展示(ポスター、学生作品)
	多目的ホール		特別支援学校卒業生等の音楽マルシェ
	第1・2会議室		学び・アクティビティ体験
	第2・3研修室		ICT 支援機器・教材・玩具体験/相談室
			休憩室
2日目 10月27日 (日)	ホワイエ	重度障害者・生涯学習ネットワーク展示(ポスター、学生作品)	
	多目的ホール	フォーラム第1部	フォーラム第2部
	第1・2会議室	ICT 支援機器・教材・玩具体験/相談室	
	第2・3研修室	休憩室	

6. 会場図 新百合トウェンティワンホールの地下2階

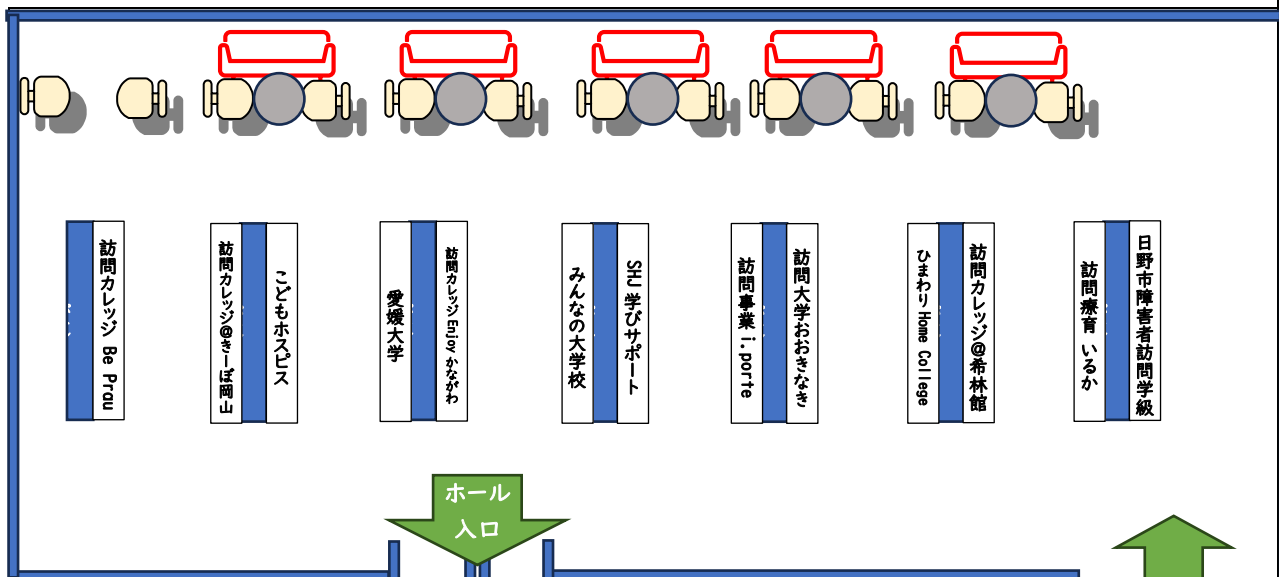
最初にホワイエ入口にて受付を行い、各会場にご入場ください。フォト・スポットを設けますので、来場の記念に写真をお撮り下さい。



7. 受付&フォト・スポット&重度障害者・生涯学習ネットワーク展示◆（ホワイエ）

地下2階ホワイエ入口の受付を行い、展示見学のあと各会場へ移動して下さい。

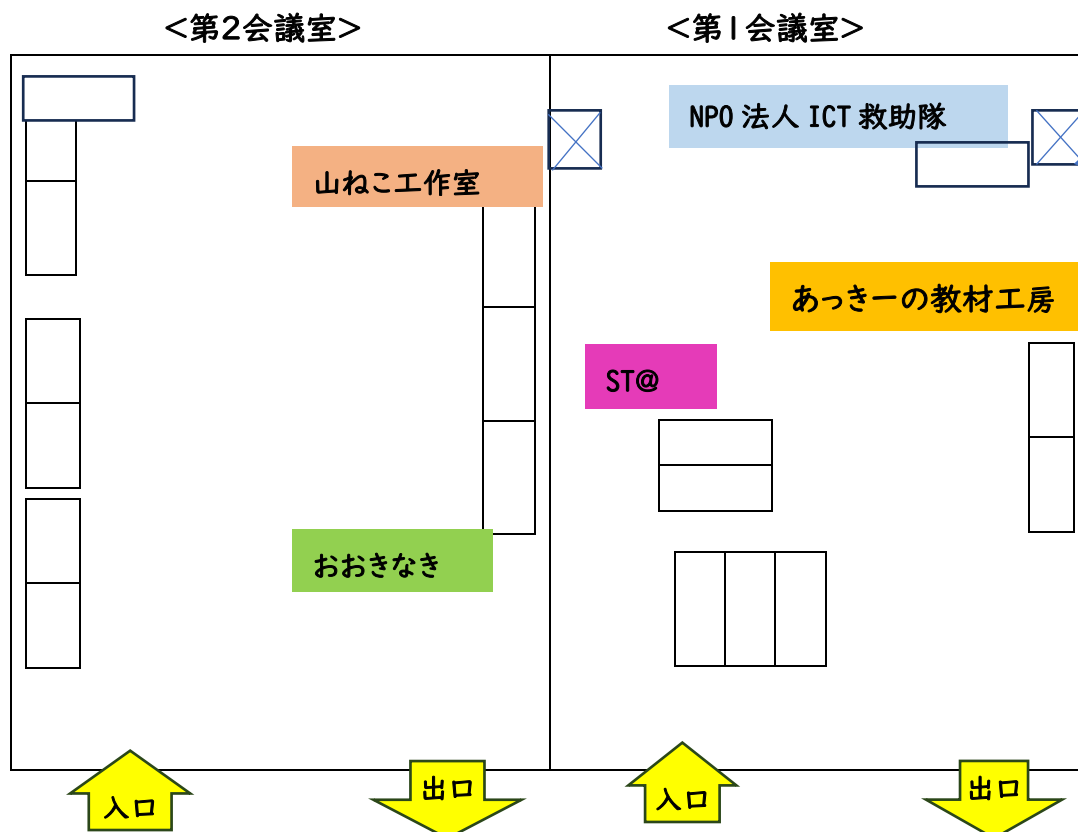
フォト・スポットでは、来場記念に写真を自由にお撮り下さい。展示は、訪問型生涯学習支援等に取り組む会員団体の紹介と学生の学びをポスターと作品等で紹介します。



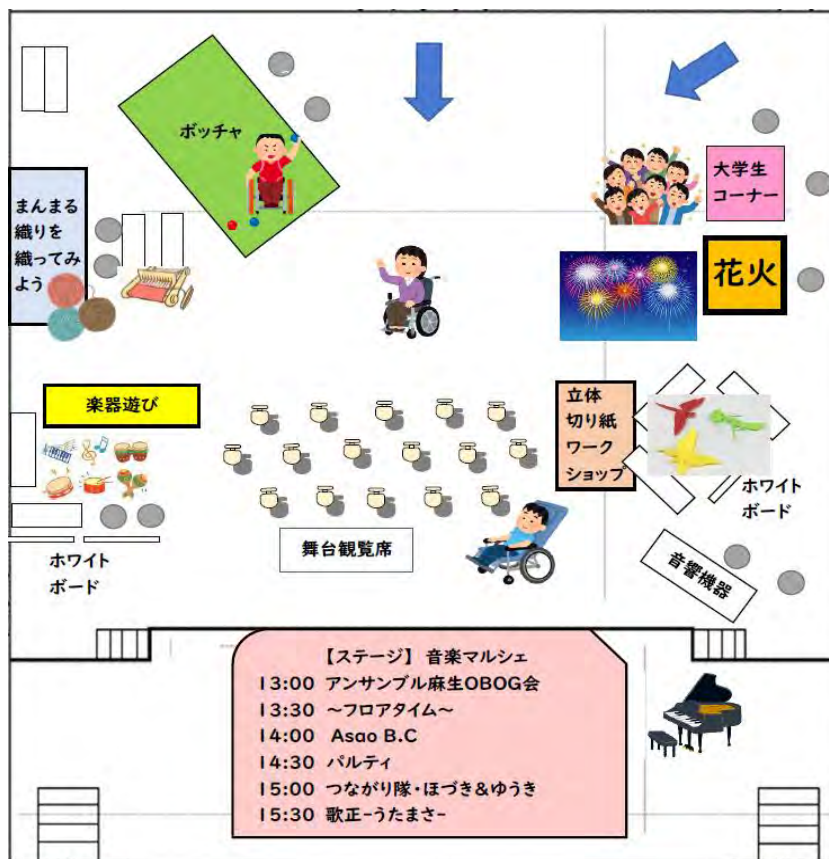
8. ICT 支援機器・教材・玩具体験/相談室相談室（第1・2会議室）

学生が学びの中で使用している支援機器、教材や玩具等を会場で体験できます。各種スイッチ、おもちゃ、意思伝達装置等の相談も受け付けます。

（出展：あっきーの教材工房、NPO 法人 ICT 救助隊、ST@、山ねこ工作室、おおきなき）



9. 音楽マルシェ／学び・アクティビティ体験（多目的ホールステージ／フロア）



10. 生涯学習を推進するフォーラム（多目的ホール）

<第1部>学生の学びの発表とレクリエーション 午前 10:00～12:00

①オープニングビデオ ②挨拶

- ③来賓紹介 神奈川県福祉子どもみらい局共生担当局長 山本千恵 様
 神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進担当部長 田所健司 様

- ④学生紹介（オンライン）岡山：井桁大臣 東京：佐藤友哉
 神奈川：宇佐美愛海琉、岡村勇輝、橋詰隼弥、朝比奈佑輔、三野梨緒

- ⑤音楽会『ピッカショータイム』 ＊協力 一般社団法人ピッカ
 エンターテインメント集団「ピッカ」が「歌とバンド演奏、マジック」による45分間をお届け！

<第2部>講演とシンポジウム 午後 13:00～15:40

①基調講演 「『障害者の生涯学習の推進』に向けた文部科学省の取組」

星川正樹（文部科学省 総合教育政策局 障害者学習支援推進室 室長）

②シンポジウム 「全国に広げよう 重度障害者の生涯学習ネットワーク」

- ・藤原千里（NPO 法人ひまわり Project Team 保護者）＜東京＞
- ・三野清香（訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者）＜神奈川＞
- ・木川純子（千葉県立袖ヶ浦特別支援学校）＜千葉＞
- ・西村理佐（訪問カレッジ「Be Prau」）＜埼玉＞
- ・白神恵子（訪問カレッジ@きーぼ岡山）＜岡山＞
- ・堤 英俊（文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」 都留文科大学教授）
- ・講評 松田 直（元国立特殊教育総合研究所研究員・群馬大学教授・高崎健康福祉大学教授）
- ・コーディネータ 新井 雅明（田園調布学園大学・教授）

Ⅱ 実施結果

Ⅰ. 参加者状況

2 日間で参加者数のべ 301 名、スタッフ数のべ 155 名、合計 456 名がこのイベントに関わった。

		参加者数	所属等							住所等				
			障害学生	家族	教育	医療	福祉	行政	他	神奈川	東京	千葉	埼玉	他
10 月 26 日		142	4	15	15	3	11	1	18	42	9	0	4	4
10 月 27 日	①	85	5	14	12	3	6	2	7	32	16	2	5	3
	②	41	0	6	21	4	6	4	0	22	15	0	2	2
	③	33	4	9	8	7	3	1	0	-	-	-	-	-
合計		301	13	44	56	17	26	8	15	96	40	2	11	9

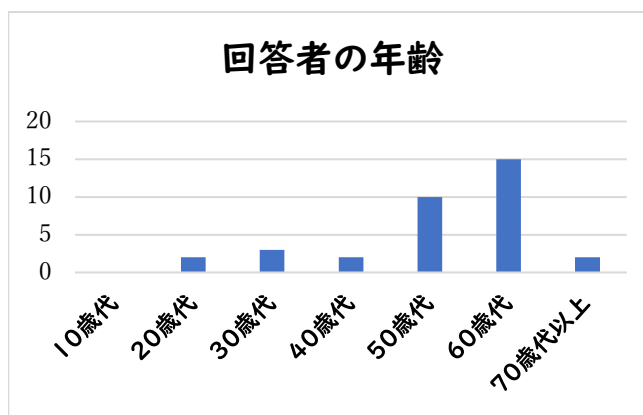
※1 10 月 27 日の①は会場で当日申し込みの会場参加、②は事前申し込みの会場参加、③はオンライン参加。

※2 参加者数は、代表者と同行者数の合計であり、内訳の所属等や住所等の数は代表者の内訳なので、参加者数と内訳数合計は等しくはならない。

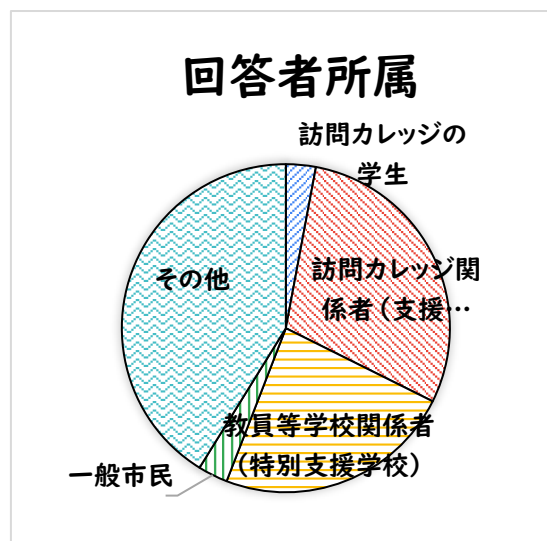
2. アンケート結果

問 1 回答者についてお答えください。

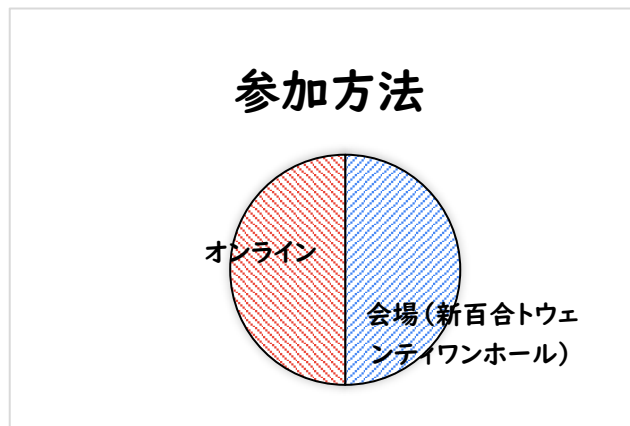
(1) 年齢 (n=34)



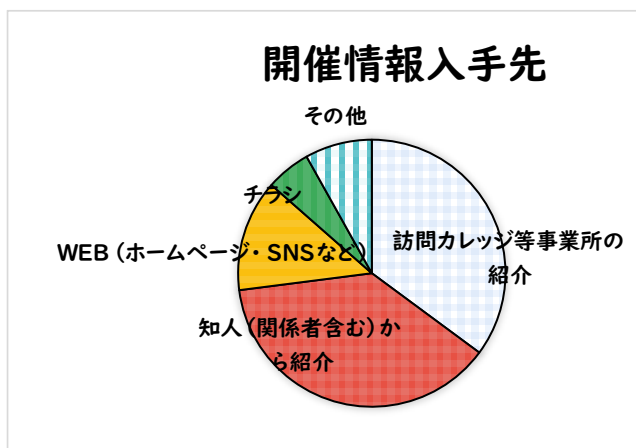
(2) 所属 (ひとつ選択) (n=34)



(3) 参加方法



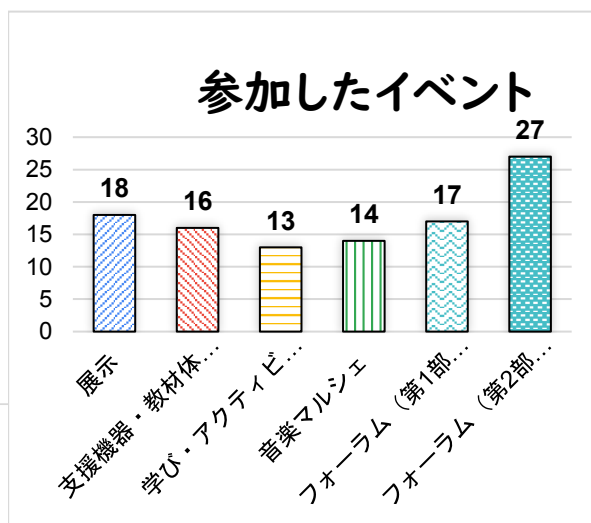
問2 本イベントの開催をどのようにお知りになりましたか。あてはまるもの全てを選んでください。



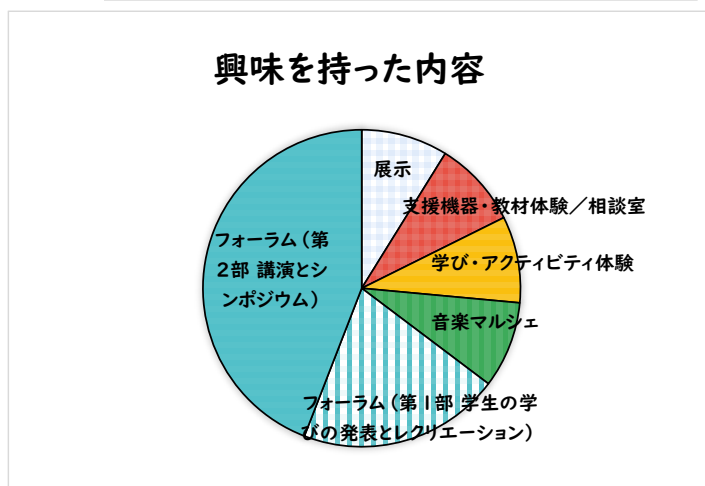
(n=34)

問3 本イベントで、参加・見学・体験(直接・間接を問わず)したものを全て選んでください。

(n=34)



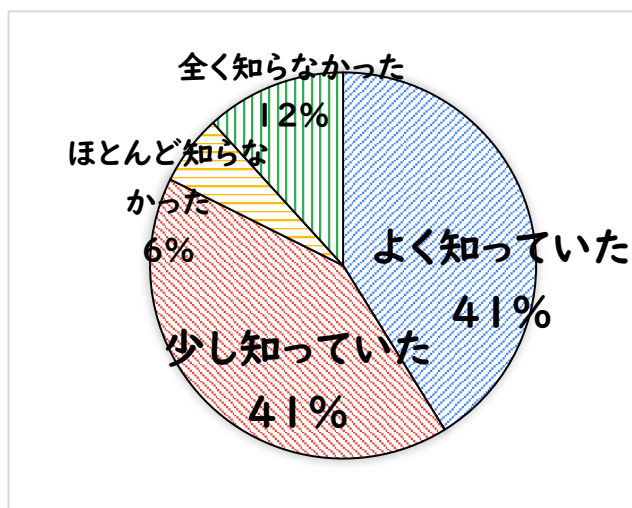
問4 本イベントで、「一番興味をもった内容」は何でしたか?(参加、不参加問わず。一つ選んでください。)(n=34)



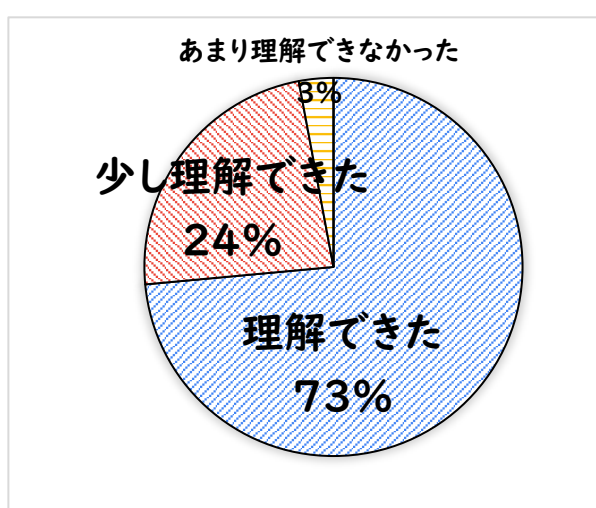
問5・問6 このイベントに参加する前と参加後における違い

(1)「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)について

問5 このイベントに参加する前(n=34)



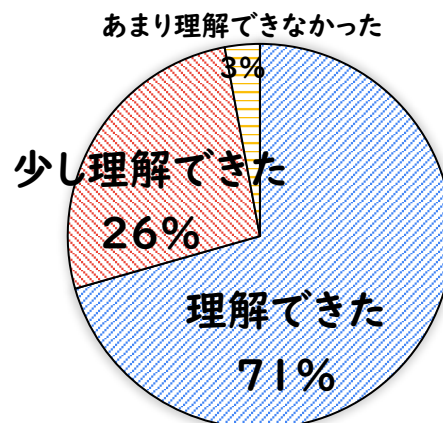
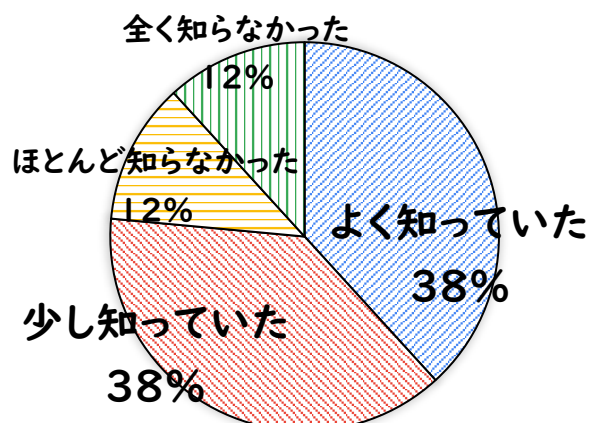
問6 このイベントに参加した後(n=34)



(2)「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)での「生涯学習」の取り組みについて

問 5 このイベントに参加する前 (n=34)

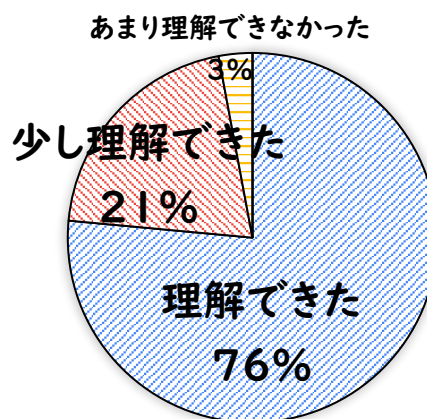
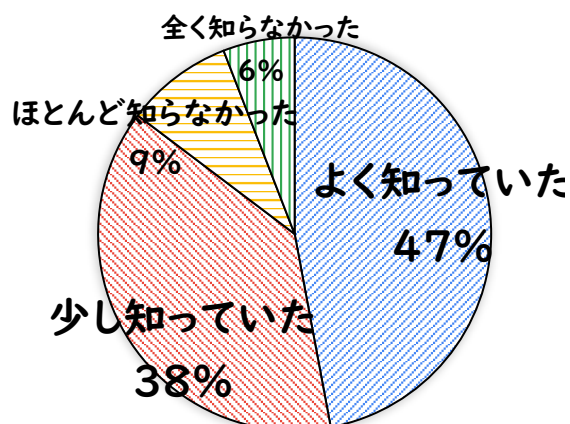
問 6 このイベントに参加した後 (n=34)



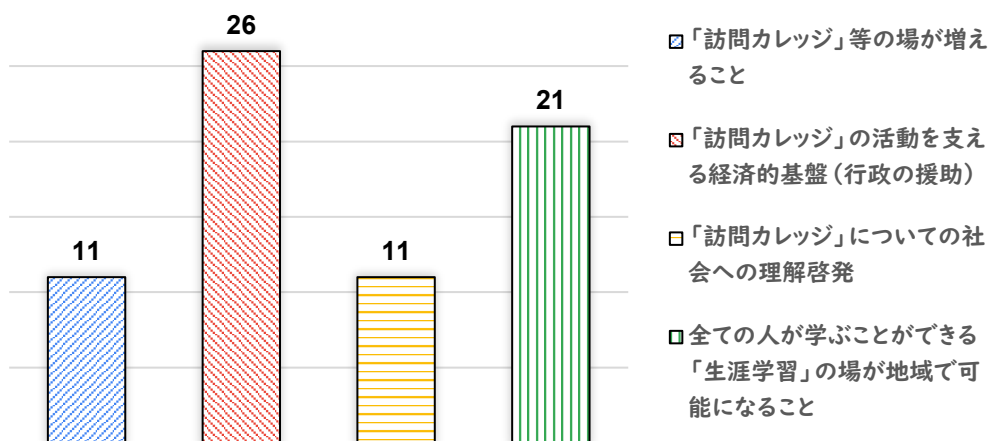
(3) 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」の必要性について

問 5 このイベントに参加する前 (n=34)

問 6 このイベントに参加した後 (n=34)



問 7 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」が、さらに充実するためにお聞きします。必要だと考えることを2つ選んでください。(n=34)



問 8 多くの方にサポーターとして参加してもらうためのアイデアがあれば教えてください。(主な意見)
(n=16)

- ・現役教員が知る、体験できる機会として①初任研や年次研の他校訪問や社会体験先に加えてもらう②夏の研修の進路先訪問に加えてもらってオンラインで参観させてもらってはどうか。
- ・ボランティアへの紹介動画はとてもわかりやすい。短く動画でわかりやすくアピールすることが大切。す。
- ・メディアを含め多くの人に「訪問カレッジの取り組みやカレッジを必要としている人」がいることを広く認知してもらう事が不可欠だと思います。そのためには重度重複障害を持つ方ご本人、あるいは保護者の方がメディア等の露出を躊躇わないことが必要なのかなと思いました。
- ・各自治体のボランティア講座や大学の市民講座など、一般の生涯学習の中で当事者を講師とした(通訳としての支援者付きで)広報と人材育成を図ってはどうか。

問 9 このイベントをとおして、あなたの気持ちの変化があればお聞かせください。(主な意見) (n=21)

- ・重度障害者の学びなどについて、各支援団体が創意工夫して個々人にあったやり方になるよう尽力され、また、それを楽しみながらやっている様子がとてもたくましく、励みになった。
- ・訪問カレッジが一部の人だけのものではなく生涯学習社会の一要素なんだという意識になった。
- ・誰しもが豊かに生きていくことができるためにもカレッジの事業は必要だと心から感じました。
- ・この会で実践を聞くと、命って尊いなとつくづく思います。「学び」を本当に求めている学生さんたちの煌めきが眩しく感じられました。
- ・今回は第1回、第2回からの経過を感じる会でした。いい意味で。打ち上げ花火的ではなく、この会を継続する形を模索されているのかなと感じました。規模は今のままでもいいと思うので、ぜひ継続してもらいたい、そのためには若手の担い手が増えたらいいなと思いました。
- ・誰しもが豊かに生きていくことができるためにもカレッジの事業は必要だと心から感じました。

問 10 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)へ期待することがあればお聞かせください。(主な意見)
(n=20)

- ・卒後も成長発達していく。学びを止めない体制作りの必要性。
- ・学習したい人全てに学びを届ける、という支援団体の姿勢にとても共感した。
- ・重度重複障害者の生涯学習こそ、行政の支援がなければ、とても厳しい取り組みです。
- ・日野市の実践のように自治体の生涯学習の一つとして、訪問カレッジの実践が位置付く事を期待する。
- ・訪問型学習支援のノウハウは、学校や社会につながる事が困難な方への学びのアプローチとなるのではないのでしょうか。各地で行われている訪問カレッジの取り組みを、「訪問型生涯学習支援」として発信することができないか。対象者が少ないことが制度化に向けた障壁になるのならば、広くとらえることで多くの人にとっても必要な制度となるのではないか。今はその核となる取り組みととらえることもできるかもしれない。

3. 参加者レポート おおきな事務局 竹内理恵さま

第3回 訪問カレッジ「学びの実り 文化祭」に参加して

—医療的ケアの必要な重度障がい者の学びの成果を発表する文化祭—

私が参加したのは、2日目のフォーラムです。各地で学んでいる学生さんから自己紹介がありました。

ご自身の作品が入賞した彼は、池袋芸術劇場に飾られた絵をオンラインで見学し、その喜びをパソコンの字幕と同時にご本人の音声で、ゆっくり言葉を噛み締めながら伝えてくれました。県立のスポーツセンターで行われるパラスポーツ教室のチアダンスに、オンラインで参加されるという方もいました。社会に出て自分の力を発揮する機会を作ろうと、自宅で作った野菜を仲間と一緒に地域で販売している八百屋さんも登場しました。そこでは、穫れた野菜の絵で絵葉書を作ったり、切り口をスタンプにして絵にしたり、本人の気持ちを丁寧にくみ取って生活に取り込む授業がなされていました。英字新聞で素敵なエコバックも作成し、近所のコーヒーショップとコラボして旬の野菜惣菜とコーヒーのランチボックスにしてはどうかと楽しい発想も生まれていました。「環境やできることは千差万別でも、自分と社会がつながっているという臨場感を体験できるよう、ICTなどを活用して環境を工夫すれば、活躍の場を広げられるのではないか」と夢はつながっていました。こうして地域に溶け込んでいく動きも見られ、ICTへの期待が膨らみます。他にも中秋の名月の観察やウクレレ演奏、ドジャースの話で英語など多岐にわたる勉強をしたり、大学生との関わりも持って嬉しかった、そして、以前より意欲的になったと溢れんばかりの表情で発表してくださった方もいました。また、視線入力でゲームを操作してハロウィンを楽しんだり、ゲームに登場する生き物の研究もしようと先生に声をかけられ、好奇心を揺さぶられて目を見開いている学生さんもいました。宇宙や恐竜が好きという個々の興味を見出し、支援者と一緒に学びを掘り下げている様子も見られました。

今回は、重度の障がいを持つ方と直接関わりのある方々が、一人一人のニーズを具現化した取り組みをご紹介下さり、大変興味深く拝聴させていただきました。皆さまの興味の対象は多岐に及んでいて、ICTの活用が本人の思いを直接伝える手助けになったり、空間を超えて行きたいところに連れて行ってくれたり、専門的な情報を得ることができたり、重度の障がいの方の世界をどんどん広く深くしてくれていることを実感しました。ご本人方からも「学ぶこと」の楽しさを、その息づかいや目の動きで、緊張した面持ちからも伝わってくる「ワクワク感」で、私たちも感じる事ができて何よりも嬉しく、そして、一人でも多くの方々にこの活動をお伝えしたいという思いが募りました。

ピッカショーでは、日頃中々味わえない生の演奏とマジックショーに引き込まれ、ワクワクしたりドキドキしたり。貴重な外出の機会をさらに豊かな時間にしてくださいました。

基調講演は、文部科学省の障害者学習支援推進室の星川室長による「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」でした。この6・7年で、理念が徐々に実践へと広がりを見せている様子が感じられました。特に「『福祉関係団体』発の取組と行政との連携」や「『共に学ぶ』様々な実践」（資料集 P3の 10・11）は、これからの活動のヒントにもなり、希望のタネを蒔いてくださいました。

シンポジウムでは、訪問カレッジの活動をされている5つの団体の取り組みが紹介されました。

- ①「NPO 法人ひまわり」は、医療的ケアのあるお子さんの保護者が、母親目線で立ち上げたプロジェクトチームです。学校に付き添う時間の長い保護者が、安心して母子分離できるようにと放課後活動をはじめ、卒業後は生活介護事業所で個々の状況に合わせた日中活動支援を行ったり、地域社会との接点も取り入れた生涯学習支援へと拡大して行きます。「こんな環境があったらいいな」という親の思いは、その活動内容も工夫が凝らされ充実しています。移動支援の導入は本人の QOL を高め、介護者のレスパイトも図られました。新宿区立新宿養護学校とは場所や用具の提供というハード面だけでなく、学校経営の指針の中に「子どもの発達、将来を見据えて生き方を啓く」とあり、親子共に居場所作りを活性化していくことも謳われています。人材育成にも取り組まれ、地域の福祉や医療関係の学生と訪問学級の経験のある先生とペアになって、学校の授業の一環として重症児に関わっていただく活動もしています。質の高い交流ができ、大学生にとっても今後活かせる体験の場となります。子育ての過程の中で、年月をかけて着実に築き上げていった取り組みだと思えます。
- ②訪問カレッジ Enjoy かながわのカレッジ生、三野梨緒さんは、今回のイベントへの参加に瞬きで即答されたそうです。パソコンの画面を視線入力で操作しながら授業の様子を紹介してくれました。彼女は視線入力だけでなく、足指でスイッチの操作もして、ミシンであずま袋を作成したり、売買契約もして販売もしたりしています。ワンピースまで作っていました。初めての選挙にネットで候補者のことを勉強して、(身体障害者手帳をお持ちの選挙人として)郵便等による不在者投票もされました。「ウー」「ウー」と声も聞かれ、彼女が動かす視線には、彼女の誇りと喜びが感じられました。生き生きとした感動が伝わって来ました。
- ③千葉県立袖ヶ浦特別支援学校の木川先生は、訪問学級の経験者や大学の先生らと学習会を重ねて、「千葉らしい訪問カレッジ」を立ち上げようとされています。教職や福祉に関心のある大学生との連携、大学や特別養護老人ホームとの関わりなど、地域と結びついた活動が目を見せます。
- ④訪問カレッジ「Be Prau」は、超重症児の母親たちが、「社会を生きる人」として自分らしく自由に生きてほしいと立ち上げたカレッジです。外出がままならない超重症児にとって自宅は「開かれた小さな社会」。その社会は色々な学び合いによって豊かになるし、小さなイノベーションも起こしていきます。「わたしの人生の主人公はわたし」「I'm here!」に、たとえ小さな「Yes!」でも応えていきたい気持ちになります。
- ⑤訪問カレッジ@きーぼ岡山は、「いつでもどこでもずっとずっと学び続けよう!そして希望を語り合おう!」を合言葉に、何と言っても画期的なのは、「とりあえず、できるところから始めよう」と試みていることです。関わる方は、友達、家族、ヘルパー、作業療法士、看護師、ボランティアなどどなたでも。運営も、「重度訪問介護の仕事として」「授業料をもらう」「カンパ」など。理解ある方々や事業所との出会いも生まれていますが、そもそも医療的ケアができる事業所は少なく、安心・安全がメインで、「学習」の時間や場所はほとんどありません。ICT 機器に関しては、活用できる環境も使える人もほとんど皆無。継続していくためには、やはり制度化(訪問型生活介護? 県・市の委託事業? 新たな制度?)や人材育成

が必須になってくるようです。「私たちだって、生涯学習!希望を語り続けよう!」と。

文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」である都留文科大学の堤先生のお話は、「学ぶこと」「教えること」は何か、立ち止まって考えるきっかけをくださいました。心に残った言葉を振り返ってみます。

- ・「生(なま)の体験をくぐらせ、感情を揺さぶる(ワクワク感)」「それを対話を通してふりかえってことばにし、文や絵で綴る(=学ぶ)」「ワクワクを仕掛け、引き上げ、支える(=教える)」
- ・教える側は他者に意図的に介入しているのだから謙虚さや反省が欠かせない。
- ・分かり得ない他者の世界を理解しようとする。こと。「身体のことば(目線、声、ふるまいや筋肉の動き、身体の微細な動き)をつかむ。ひっきり(違和感、予想外、揺らぎ)を大切にする。急がずではなく、じっくり待つ。」
- ・教えることは学ぶこと。

特に私も人と関わる仕事をしているので、「意図的に介入しているのだから謙虚さと反省が欠かせない」という言葉が刺さりました。

みなと舍ゆうのかかわり相談担当 松田先生の講評では、かかわり合いの基本を教えてくださいました。かかわり合いの出発点は、その人が学びたいことを深め広げること。気づかないまま過ごして来たことも押しつ引きつ提案してみる。学びたいことがわかりにくい時は、「側にいてもいいですか」と寄り添い、表情や動きを見て働きかけながら信頼関係を培う。「細かい意思」を小さい動きで表出できるようにスイッチやセンサーを活用し、より確実に表出できるよう工夫する。大切なのは、周囲から面白いと感じる刺激を受けて(時には、面白いことを仕掛けて誘ってみる)、それをスイッチやセンサーで周囲に向けて発信したり、自分の動きで周囲に「形を残す」こと。「側にいてもいいですか」から始まるかかわり合い、そこには目に見えないけれど温かな心のセンサーが行き来しているのでしょう。

最後に飯野先生(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)からは、この文化祭の主人公の方々が、「学ぶことは楽しい」と一生懸命伝えてくれた思いを2倍3倍にしていきたい、代弁者である方々にはこの思いを受け止め広げていって欲しいとミッションを託されました。この活動を広め継続していくための活動資金を得るためには制度が必要です。5年後は皆さんの願いが叶って、ニコニコしてシンポジウムができたらいいと制度化に向けた意欲も語られました。

今年もまた、さらに実りのある文化祭に参加させていただき、私にとっても貴重な学びがありました。言葉にならない「ことば」、「細かい意思」にゆっくり丁寧に向き合う姿勢には、人と関わるということがどういうことであるかを考えさせられます。そして、どんなに重い障がいがあっても学びたい思い、学ぶ喜びが、こんなにもいのちを輝かせるということを目の当たりにして、これからも一緒に生きていきたいと思うのです。

4. 記録

受付とフォト・スポット



展示







音楽マルシェ／学び・アクティビティ体験





ICT 支援機器・教材・玩具体験/相談室相談室



生涯学習を推進するフォーラム



音楽会 『ピッカショータイム』



講演とシンポジウム



4. 考察

訪問型生涯学習支援に関する理解啓発イベントは、2022年11月25～26日に第1回訪問カレッジ「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」（パシフィコ横浜 ノース2F ガーデンラウンジB・A・C（〒220-0012 神奈川県横浜市 西区みなとみらい 1-1-1））、2023年11月3～4日に第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」（かながわ労働プラザ（〒231-0026 神奈川県横浜市中区寿町1丁目4））の2回は、文部科学省委託事業「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」の中で開催してきた。今年度の第3回 訪問カレッジ「学びの実り 文化祭」は、文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」として開催した。さらに「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」については、重度障害者・生涯学習ネットワークとして2020年11月13日に国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟101室（〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1）で第1回を開催したので今回で第5回である。

重度障害者・生涯学習ネットワーク主催「学びの実り文化祭」は、重度医療的ケア児者に対する訪問型生涯学習の持続可能な制度の在り方を研究する「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」と、学生自身による学びの発表と仲間との交流による重度障害の生涯学習文化の確立をめざした「文化祭」の2つの要素で構成している。2022年の第1回開催の頃、学びに対して「学校卒業しても学ばなきゃ行けないのか!」という学びに対する「学び=学校教育」というネガティブイメージを示す意見も聞かれたが、今

回の意見に見られた「誰しもが豊かに生きていくことができる」というように、「学び」に対する本質的な理解と、どんなに重い障害があっても「誰しも豊かに生きていく」という普遍性に対する理解が進んできたと感じる。こうしたことは、このイベント参加前と参加後の理解の深まりにもあらわれている。

今年度、文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」は従来の地域別に加え、テーマ別が設定されたことから、今回から共生コンファレンスに位置づけて開催した。重度医療的ケア児者の人数は少ないだけにニッチな課題で他の課題に埋没しかねない。それだけに継続した発信が、これからも重要と考える。_____

VI 研究のまとめと提言（案）

本研究のまとめとして、重い障害者の生涯学習を持続可能な形で確保するために、以下の提言（案）を報告する。なお、本年度は提言（案）であり、これを元に次年度さらに検討を加え、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する提言を発表する予定である。

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の制度化に向けた提言（案）

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の制度化に向けて、3つの観点で検討を行った。

1. 【障害福祉サービススキーム】による生涯学習支援の実現

①根拠法：障害者総合支援法に「（仮）居宅訪問型生活介護事業」の創設を求める

②報酬：障害福祉サービス等報酬における給付

③提案趣旨：

生活介護事業所で行われる日中活動は、利用者一人ひとりの目標や目的に合わせた活動の場により生きる喜びを感じるとともに、より生活の質を高める活動という意味で、自己実現の場である。そうした自己実現を目指した日中活動は、利用者一人ひとりの生涯学習そのものだと考える。しかし、従来、障害福祉サービスにおいて、「学び」や「学習」ということばの使用は、タブーであった。今回、令和6年度補正予算において厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」が実現した。障害福祉サービスにおいて、生涯学習のニーズとその必要生が認められたという意味で画期的な事業であり、モデル研究に期待する。

しかし、「施策のスキーム図」では、利用者は通所を前提にしている。生活介護事業所の利用者は、障害支援区分が区分3以上であり、特に重症心身障害や進行性疾患のある者は、その病気や障害の重度化により通所が困難になる場合があり、通所ができなくなると生活介護事業所を退所せざるをえない状況にある。事実、重度障害者・生涯学習ネットワークに参加している訪問カレッジの学生には、生活介護事業所への通所が困難になってから利用を始めた学生も多い。

今回のモデル研究において、ぜひ、通所者だけでなく、障害の重度化などにより通所が困難になった利用者の自宅等を生活介護事業所からスタッフを派遣する訪問型（アウトリーチ）支援を加えていただき、そのモデル研究を踏まえて、障害者総合支援法に「（仮）居宅訪問型生活介護事業」の創設を願っている。

2. 【社会教育スキーム】による生涯学習支援の実現

①根拠法：社会教育法第3条

②運営予算：国の自治体補助事業（国1／2、都道府県1／4、市区町村1／4）

③提案趣旨：

教育基本法3条には「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」とあり、生涯学習社会の実現を謳っている。また、その理念は、社会教育法第3条（国及び地方公共団体の任務）があり、「国及び地方公共団体は、この法律及び他の法令の定めるところにより（中略）、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら實際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するように努めなければならない。」「国及び地方公共団体は、前項の任務を行うに当たっては、国民の学習に対する多様な需要を踏まえ、これに適切に対応するために必要な学習の機会の提供及びその奨励を行うことにより、生涯学習の振興に寄与することとなるよう努めるものとする。」に共通するものであるが、国・自治体の努力義務であり、施策の予算根拠にはなってい

ない。

一方、平成 30 年度から文部科学省が取り組む「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」等は、生涯学習にアクセスしにくい障害者や生涯学習支援に取り組む私たちにとって、とても価値のある国の取組と考えている。しかし、研究事業として7年目となり、どのような形で一般事業化するのか現時点では見えてこない。

厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」を踏まえて、文部科学省には、地方公共団体が行う障害者の生涯学習支援に関する社会教育への補助事業化と、障害者の生涯学習事業を行う地方公共団体の根拠となる法令、例えば社会教育法の改正や「(仮称)障害者の生涯学習支援法」のような法改正又は法律の制定を求めたい。

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の研究では、さまざまな病気や障害のある方々の学びを支援してきた。その中には、脳腫瘍などのガンや脳・神経・筋肉等の進行性難病のためにターミナル(終末期)として病院を退院し、在宅医や特別支援学校からの紹介で、学習支援を始めた学生もいて、亡くなる最後の半年を共に生き、共に学んできた。こうした方々は通所系障害福祉サービスの利用や、障害者手帳取得から始まる障害福祉サービスにつながりにくいという課題がある。

このような生涯学習にアクセスすることが最も困難な方々の生涯学習を保障することは、教育基本法第3条の生涯学習社会の実現に近づくことにつながると考える。

3.【障害福祉と社会教育のハイブリッド】による生涯学習支援の実現

①根拠法:障害者総合支援法に「(仮)居宅訪問型生活介護事業」の創設を求める

②報酬:障害福祉サービス等報酬における給付

③提案趣旨:

社会教育において重度障害者の生涯学習支援を行う直接的な支援システムは存在しない。また、社会教育に対する予算は決して多くはない。そのため、本提案の【社会教育スキーム】単体での施策実現は、困難と考える。

一方、厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」では、施策の概要に「生活介護において、特別支援学校教員 OB 等の雇用や ICT 機器の導入等により、生涯学習を実施するモデル事業を実施」とある。特別支援学校 OG 等「学びのノウハウ」の蓄積ある人材の活用である。

障害福祉サービスの重度訪問介護では、障害者自身が選んだ人をヘルパーとして事業者に登録し、自分専属のヘルパーとして派遣を受ける「自薦ヘルパー」「パーソナルアシスタント」という取り組みがある。

障害福祉サービスにおいて、「学び」「学習」ということばの使用がタブーではなくなったことから、「自薦ヘルパー」の仕組みと同様に、重度障害者の「学びのノウハウ」を持つ支援者(学習支援員)を障害福祉事業者や社会教育提供事業者に登録して派遣を受けるという社会教育要素を障害福祉サービスの中で実現させるというのが「【障害福祉サービスと社会教育のハイブリッド】による生涯学習支援の実現」である。

上記、障害福祉サービス、社会教育、障害福祉と社会教育のハイブリッドなど、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」を持続可能な形にするため、厚生労働省・文部科学省において検討されることを期待する。_____

おわりに

「だれもが学び続けられる社会へ」

重度障害者・生涯学習ネットワーク副会長 成田 裕子

教育基本法第3条において、生涯学習の理念として「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と規定されています。

私たちが活動の対象としている重度障害の方は、一人一人がそれぞれの思いを持ち、生涯学習の機会を希求していますが、生涯学習の機会と場へのアクセスは難しい状況です。

訪問型生涯学習支援は、「その人らしく豊かに生きる」生き方の支援です。

訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」を通して、私たちは「学びの力」を体感しています。日々の学びが、障害の重い方の閉ざされた生活の窓になり、楽しさや意欲に灯をつけ、互いの「生きる力」になっています。

部屋にカレッジ生と制作した作品が飾られるたびに、訪問看護・介護に訪れる介護職員や医療職の方々の目に留まり、学びの過程や本人の様子に話題が広がります。「テレビを見ていたら、一緒に学んだ事が取り上げられていた。」と、嬉しそうに瞬きで伝える人もいます。重度障害者と言われる人たちが、学びの中で見せる表情の変化や意欲の表現は、障害のある方の生涯学習に関する認識を変えてきています。重度障害者の生涯学習の実現（制度化）は、だれもが学び続けられる社会の形成（生涯学習社会）に不可欠です。

加えてこれからは、障害のある方も巻き込む生涯学習の機会や場が、地域社会の中で育つことが求められます。そのためには、私たちの訪問型生涯学習支援の学びや関わり方のノウハウが、学校現場以外の福祉や社会教育の現場でも活用されていく必要があると思います。

私たちのネットワークは、団体の数も規模も小さいですが、今年度の実践報告にあるように、そこから得られる知見は非常に大きいものがあります。そして、重度障害者の方の訪問型生涯学習支援に関心を持つ方は、全国に点在しています。私たちネットワークの存在が、それらの方の思いを支え、繋ぐ役目をしています。

これからも一層のご支援・ご協力を賜り、だれもが学び続けられる社会を目指し、着実に歩み続けたいと思います。

重度障害者・生涯学習ネットワーク(令和7年2月現在)

	事業名	事業 開始年月	事業者名	法人等の 代表者名	事務局所在地
1	日野市障害者訪問学級	1981年4月	日野市障害者問題を考える会	名取潮子	東京都・日野市
2	訪問療育 いるか	2011年12月	NPO 法人かすみ草	早野節子	東京都・杉並区
3	訪問カレッジ@希林館	2012年9月	NPO法人地域ケアさぽーと研究所	飯野順子	東京都・小平市
4	ひまわり Home College	2013年4月	NPO 法人ひまわり Project Team	藤原千里	東京都・新宿区
5	訪問大学おおきなき	2014年4月	NPO 法人訪問大学おおきなき	相澤純一	東京都・太田区
6	訪問事業 i.porte(あいぽると)	2017年4月	NPO 法人あいけあ	岡安 玲	神奈川県・川崎市
7	訪問カレッジ静岡	2018年4月	静岡県障害者就労研究会	瀬戸脇正勝	静岡県・静岡市
8	在宅訪問学習支援事業「SHJ 学びサポート」	2018年4月	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン	松本恵里	東京都・杉並区
9	みんなの大学校	2018年4月	一般社団法人みんなの大学校	引地達也	東京都・国分寺市
10	訪問カレッジ Enjoy かながわ	2019年4月	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会	成田裕子	神奈川県・横浜市
11	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	2019年6月	愛媛大学	苅田知則	愛媛県・松山市
12	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	2021年7月	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	佐藤良絵	東京都・昭島市
13	医療型障害児入所施設カリヨンの杜	未実施	医療型障害児入所施設カリヨンの杜	鍵本聖一	埼玉県・さいたま市
14	訪問カレッジ@きーぽ岡山	2022年6月	きーぽ岡山	真見圭子	岡山県・岡山市
15	訪問カレッジ Be Prau	2024年4月	一般社団法人ケアの方舟	西村理佐	埼玉県・さいたま市
16	障害の重い人の地域支援「ふりかけプロジェクト」	2020年12月	明石市立ゆりかご園	飯塚由美子	兵庫県・明石市
17	特定非営利活動法人合	未実施	特定非営利活動法人合	田井寿美江	埼玉県・越谷市
18	ぼれぼれ学習会	2012年6月	ぼれぼれ	田村美奈	新潟県・長岡市

令和6年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」
「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和7年3月1日

連絡先 重度障害者・生涯学習ネットワーク・事務局 担当 下川和洋

NPO法人地域ケアさぽーと研究所内

〒187-0043 東京都小平市学園東町1丁目22-6

電話:042-403-3229 FAX:042-405-1779

Email: ccsupport@icom.home.ne.jp